

比 恵 70

-比恵遺跡群第130次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書1292集

2016

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群130次の発掘調査報告書は集合建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代前期から中期初頭の集落と貯木施設を確認し、多量の木器未製品が出土しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2016年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例言

- 本報告書は博多区駅南3丁目51～54番の共同住宅建設工事に伴って2014年1月6日から2014年3月26日にかけて発掘調査を行った比恵遺跡群第130次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構実測と写真撮影は屋山、遺物実測と製図等を濱石正子、大庭友子、副田則子、屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1338	遺跡番号	0127	分布地図番号	東光寺37
調査地地番	福岡市博多区駅南3丁目51～54番				
開発面積	628.5m ²	調査面積	348m ²	調査原因	共同住宅建設
調査期間	2014.01.06～2014.03.26		担当者	屋山洋	

比 恵 70

-比恵遺跡群第130次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書1292集



遺跡略号 HIE-130

調査番号 1 3 3 8

2016

福岡市教育委員会

本文目次

Iはじめ	1	2) 土坑	37
II調査の記録	3	3) その他の遺構	40
1. 調査の経過	3	4) その他の遺物	40
2. 遺構と遺物	5	5) 動物遺存体	41
1) 壓穴土坑	5	3. 小結	41

挿図目次

第1図	周辺道路分布図	2	第19図	SK004 木製品実測図2	20
第2図	調査地点位置図	2	第20図	SK004 木製品実測図3	21
第3図	調査範囲図	3	第21図	SK004 木製品実測図4	22
第4図	II・III区全体図	4	第22図	SK030 遺構実測図	23
第5図	SK001 遺構実測図	5	第23図	SK030 遺物実測図1	24
第6図	SK001 遺物実測図1	6	第24図	SK030 遺物実測図2	26
第7図	SK001 遺物実測図2	7	第25図	SK030 木製品出土図	27
第8図	SK001 遺物実測図3	8	第26図	SK030 木製品実測図1	28
第9図	SK001 遺物実測図4	9	第27図	SK030 木製品実測図2	30
第10図	SK004 遺構実測図	11	第28図	SK030 木製品実測図3	31
第11図	SK004 遺物実測図1	12	第29図	SK030 木製品実測図4	32
第12図	SK004 遺物実測図2	13	第30図	SK030 木製品実測図5	33
第13図	SK004 遺物実測図3	14	第31図	SK030 木製品実測図6	34
第14図	SK004 遺物実測図4	15	第32図	SK030 木製品実測図7	35
第15図	SK004 遺物実測図5	16	第33図	SK026 遺構・遺物実測図	37
第16図	SK004 遺物実測図6	17	第34図	その他の遺物実測図1	38
第17図	SK004 木製品出土図	18	第35図	その他の遺物実測図2	39
第18図	SK004 木製品実測図1	19	第36図	その他の遺物実測図3	40

表目次

表1	遺構一覧	42
----	------	----

図版目次

図版1	1. II区全景 2. III区全景
図版2	1. SK001 I区 2. SK001 完掘 3. I区全景 4. SK033 土層 5. SX034
図版3	1. SK004 2. SK004 完掘 3. SK004 遺物出土状況 4. SK004 大型壺出土状況 5. SK004 砂器出土状況
図版4	1. SK004 北側 2. SK004 木材 3. SK004 エブリ 4. SK004 木製柄杓 5. SK004 木製高环出土状況 6. SK004 壺・木板 7. SK004 彩色壺 8. SK026
図版5	1. SK030 2. SK030 遺物出土状況 3. SK030 下層遺物出土状況 4. SK030 完掘状況 5. SK030 西側遺物出土状況
図版6	1. SK030 中央部遺物出土状況 2. SK030 鍾柄出土状況 3. SK030 鍾出土状況 4. SK030 長斧柄出土状況 5. SK030 木臼?出土状況 6. SK030 木器出土状況 7. SK030 土層 8. III区谷部土層

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成25年（2013年）9月25日付けで博多区博多駅南3丁目51番、52番、53番、54番の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財有無の事前調査依頼（25-2-702）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群内に位置し、申請地を囲む隣接地でも4次調査以降25次、80次、115次等の調査が行われており、申請地においても遺構が存在することは明らかであったため、埋蔵文化財審査課では建設に先だって埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図ることが必要であると判断した。それに基づいて原因者と協議を重ね、平成26年1月16日から3月26日にかけて発掘調査を行った。調査期間中は水道の設置など原因者及び関係各位の多大なご協力を頂いた。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査 平成26年度：整理報告 平成27年度）

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 常松幹雄（平成26・27年度）

同課調査第1係長 吉武 学（平成26・27年度）

庶務 埋蔵文化財審査課審査係 川村啓子（平成26・27年度）

調査担当 埋蔵文化財調査課 屋山 洋

作業員 今井純江 上野美知子 調部安正 岡村まさか 河原明子 久保サヨ子 近藤英彦

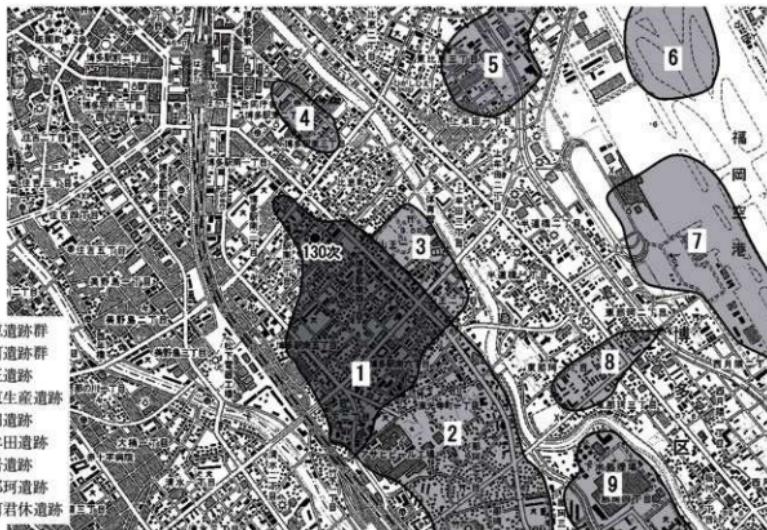
坂口壽美子 富岡洋子 中島秀司 中野忠 西藤勝喜 野内聖司 栢山恵子

吹春憲治 中村健三 竹内武俊 安武陽子 山下直美 鶩津真二郎 迎健司

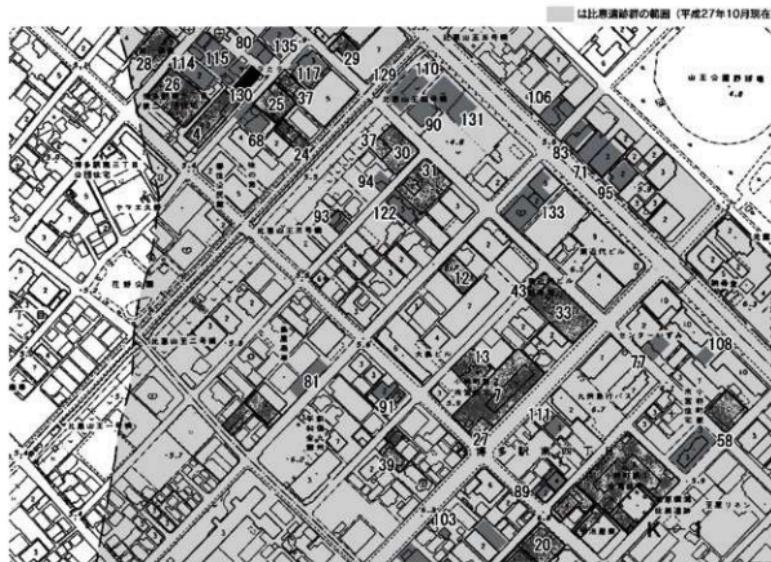
整 理 大庭友子 坂口龍子 副田則子

3. 調査区の立地と環境

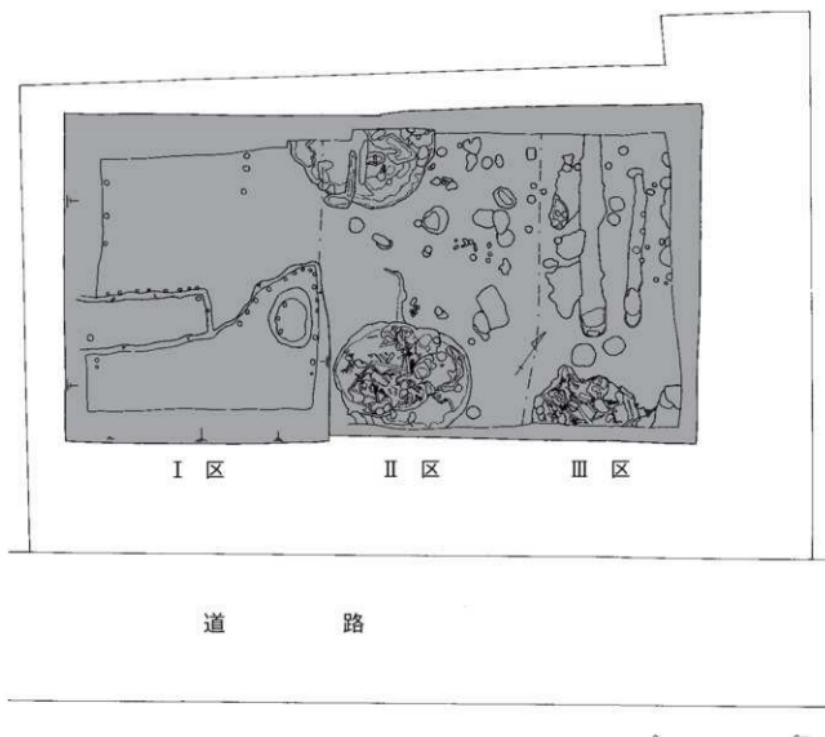
比恵遺跡群は福岡平野の中央を博多湾に向かって流れる那珂川と御笠川に挟まれた標高5～10mの低位丘陵上に立地する。丘陵は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に堆積した阿蘇山の火砕流である八女粘土層と鳥栖ローム層からなる。近隣の遺跡としては春日市から博多湾に向かって伸びる同一の丘陵上に博多湾側から比恵遺跡群、那珂遺跡群、五十川遺跡、井戸B遺跡、寺島遺跡、須玖岡本遺跡と続いている。奴国を中心とする春日市の須玖遺跡群一帯と博多湾を結ぶ連続した丘陵上だけに弥生時代の遺構が多く密に分布しており、青銅製品が多く出土すると共に鋳型や坩埚など青銅器铸造関連遺物も多く出土する地域である。比恵遺跡群は南側に隣接する那珂遺跡とは深い谷で区分されている。遺物は旧石器時代のナイフ型石器が出土しているが、遺構は現在縄文晩期の突堤文期の遺構が最も古く丘陵縁辺に分布する。弥生時代中期以降は集落は丘陵全体に広がり、銅鑛や青銅製鋤先等の青銅製品と共に青銅器製造に関わる坩埚や鋳型が出土しており、青銅器製造関連施設が存在するなど奴国の大規模な遺跡である。古墳時代後期から古代にかけては遺跡北半に「那津官家」とされる大型掘立柱建物とそれを囲む柵列が築かれるようになる。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)



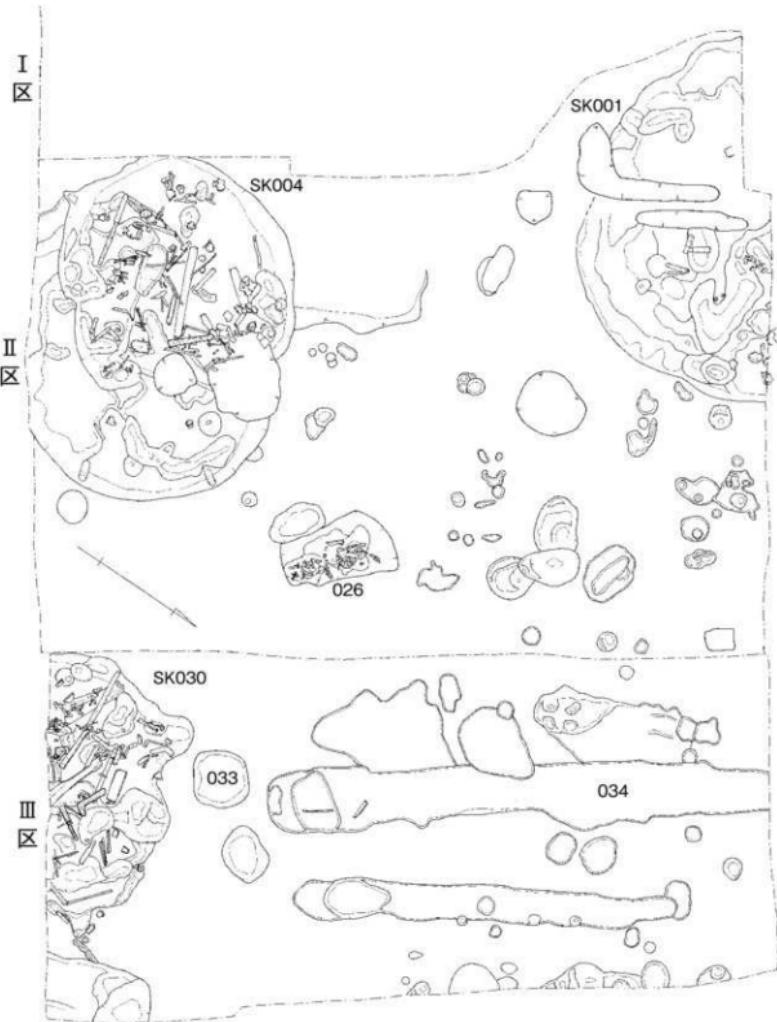
第3図 調査範囲図 (1/200)

0 6m

II. 調査の記録

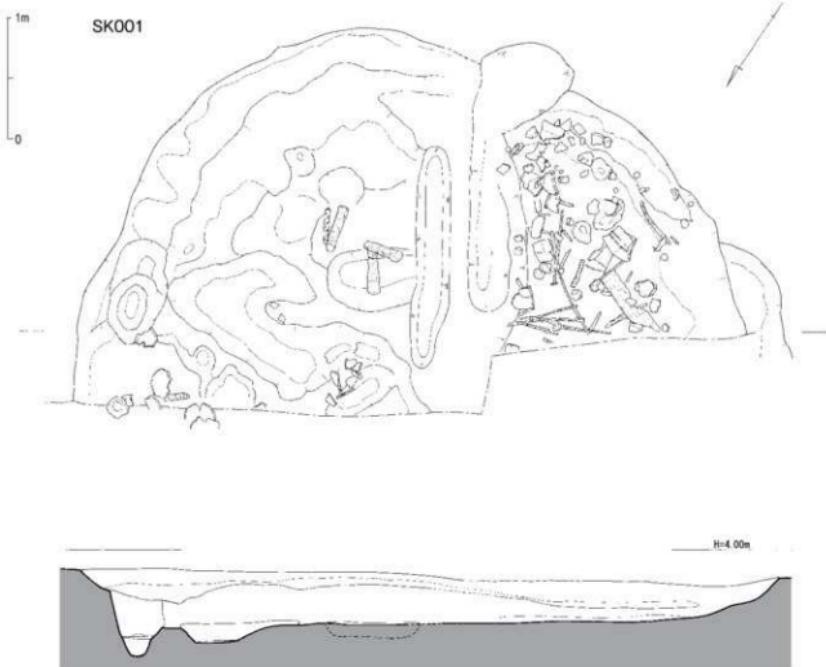
1. 調査の経過

申請地である博多駅南3丁目51番、52番、53番、54番の敷地面積は628.5m²を測る。敷地は前面道路に沿って東西方向に長く、道路に面した部分はそのまま駐車場とするため、発掘調査は建物基礎の掘削により遺構が破壊される敷地奥側の343m²を対象とした。調査時には建物基礎部分とそれに付随するエレベーター基礎など出っ張った部分を直線で結んで調査区を設定したため実際の調査面積は348m²となった。発掘調査は廃土処理のため、調査区を3分割して西側からⅠ～Ⅲ区とした。1月6日にユニットハウスやトイレ、機材の搬入を行い、7・8日に重機を使用してⅠ区の表土剥ぎを行った。周辺の調査では地表面から50cm前後で鳥糞ロームに達するが、Ⅰ区全体が近代の貯水池の中に位置しており、現地表面から1.5m下まで擾乱を受けていた。9日から遺構面に残った擾乱を掘り下げてから遺構検出を行ったが、北東隅でSK001を確認した他は貯水池の擁護壁に伴う杭列を確認したのみである。1月15日に全体写真を撮影してⅠ区の調査が終了後、1月15・16日で重機を使用して打って返しを行い19日からⅡ区の調査を開始した。Ⅱ区は現表土から90cm下で遺構面に達した。検出した遺構はSK001の続きとSK004の他に小土抗と柱穴群などである。どの遺構も湧水が激しいうえに天



第4図 II・III区全体図 (1/80)

0 3m



第5図 SK001 遺構実測図（1/40）

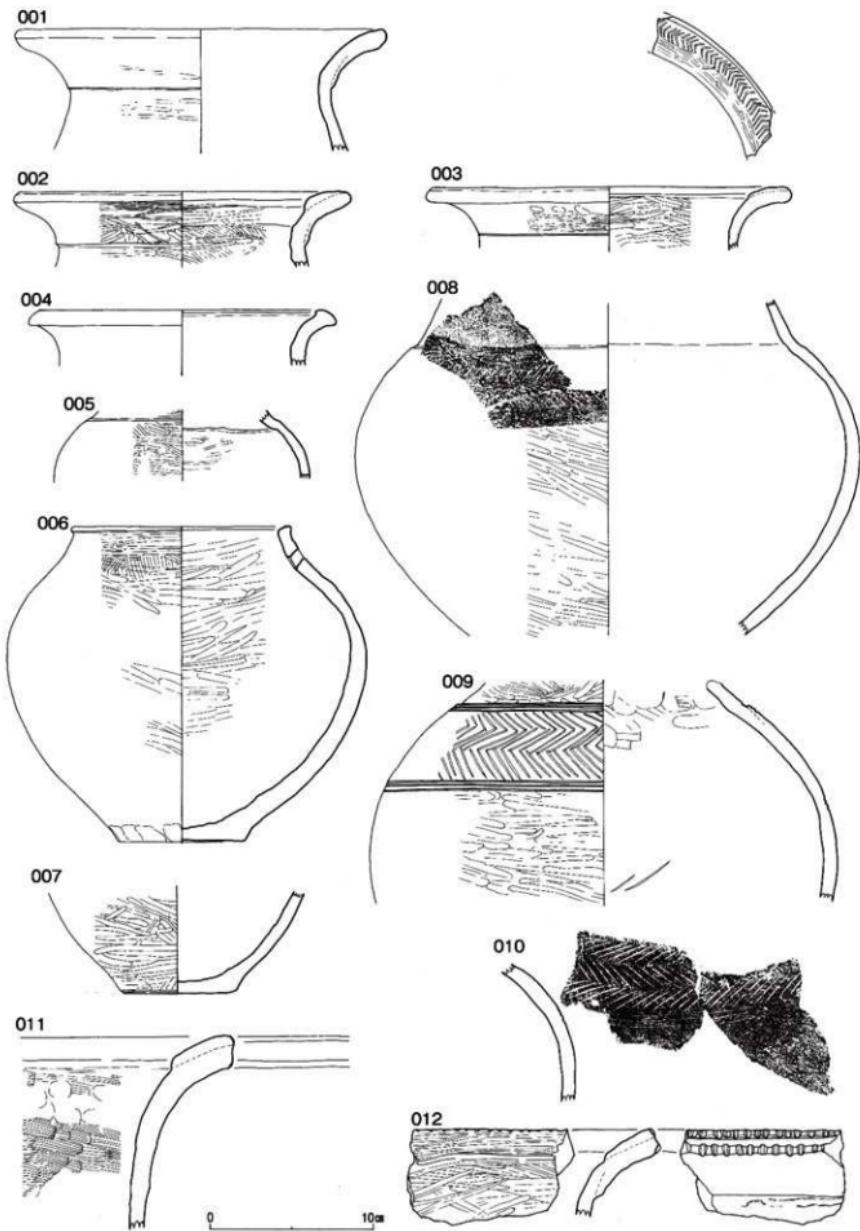
候不順で雨が続いたことから、足下の状態が悪く調査は難航した。2月4日にII区の全景を撮影し、その後木器等の取り上げを行ったのち、7日に打って返しを行いIII区の調査を開始した。III区は谷中に位置し、現地表面からの深さは1.7mを測る。湧水が多く、朝には調査区全面が水没しているような状況であった。谷中の埋土に木の葉が多く含まれていたので木器が存在する可能性を考えて、重機による掘り下げは途中で止め、下半は人力で掘り下げた。掘り下げの途中で南端部で木器が集中して出土し始めSK030としたが、遺構の輪郭は明確ではなく、結局八女粘土面での掘り込みでしか確認できなかつた。2月20日にIII区全景を撮影した後、遺物の取り上げ等を行い、3月7日に埋め戻し、13・14日で機材の撤去、3月18日にユニットとトイレ等の撤去を行って現場を終了した。

2. 遺構と遺物

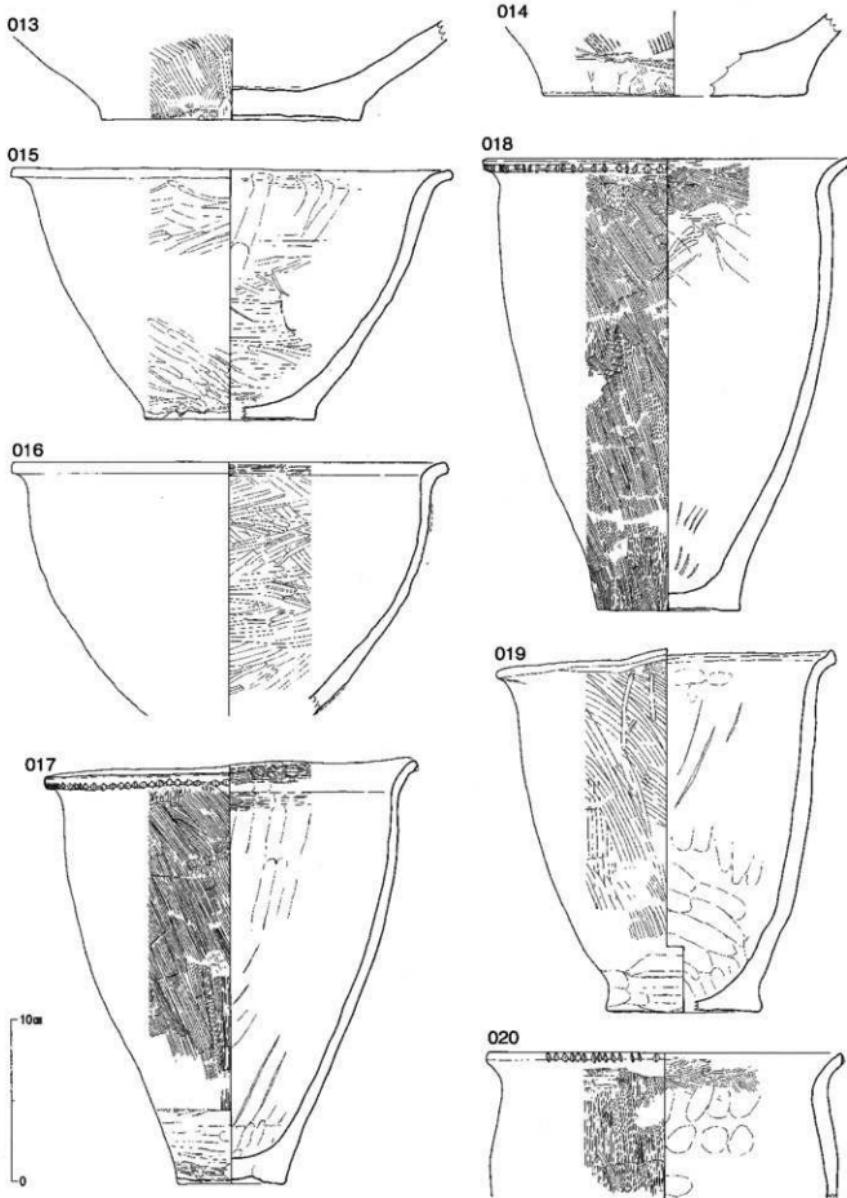
各遺構から出土した遺物に関してはP42の表に記載している。

I) 縱穴土坑 径4.3～5.9mの円形もしくは梢円形を呈する土坑である。3基とも谷中もしくは谷に接して設けられており、底面標高は3基とも3.4m前後である。底面が鳥栖ロームを掘り抜いて八女粘土層に達しており、湧水が多い。

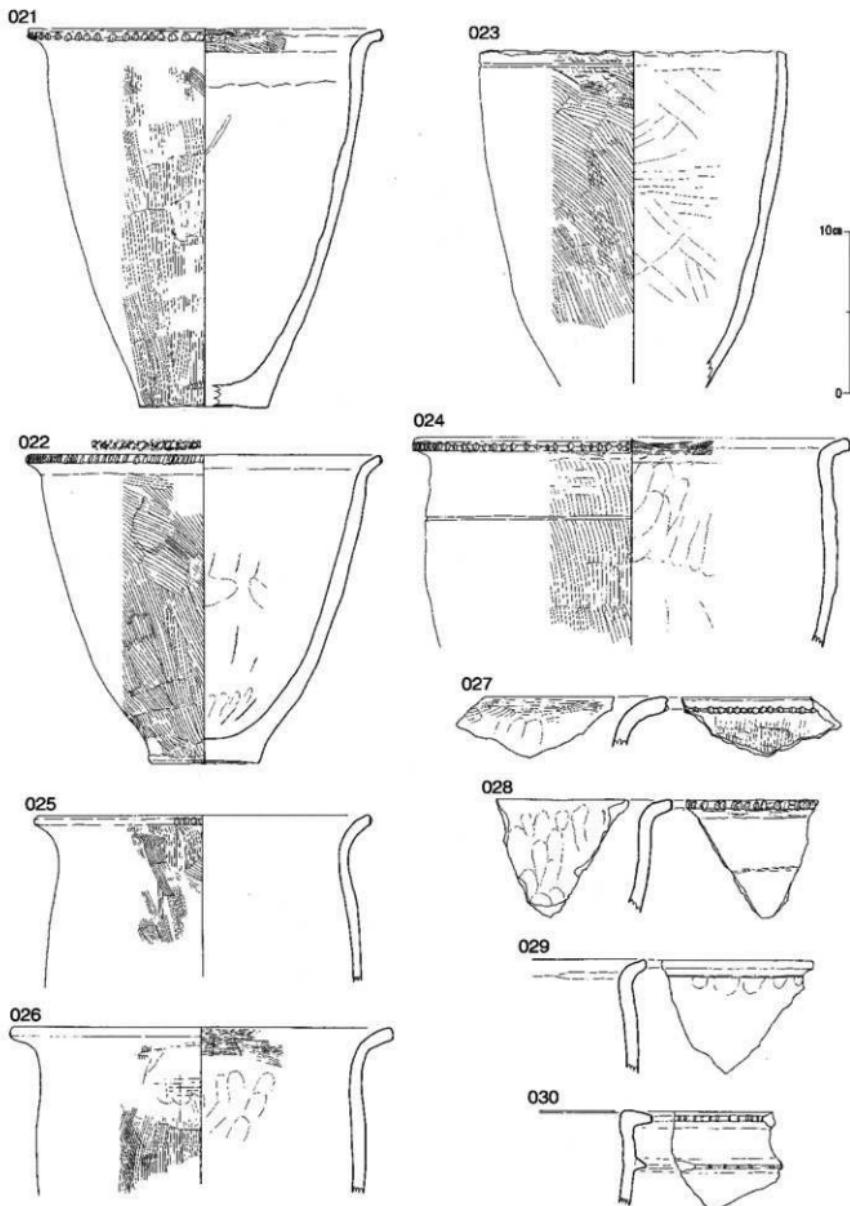
SK001（第5図）調査区中央北縁に位置する。遺構の北半は調査区外に伸びる。西側（I区部分）からは土器が集中して出土したが、中央から東側（II区部分）は底面直上まで攪乱を受けており、出



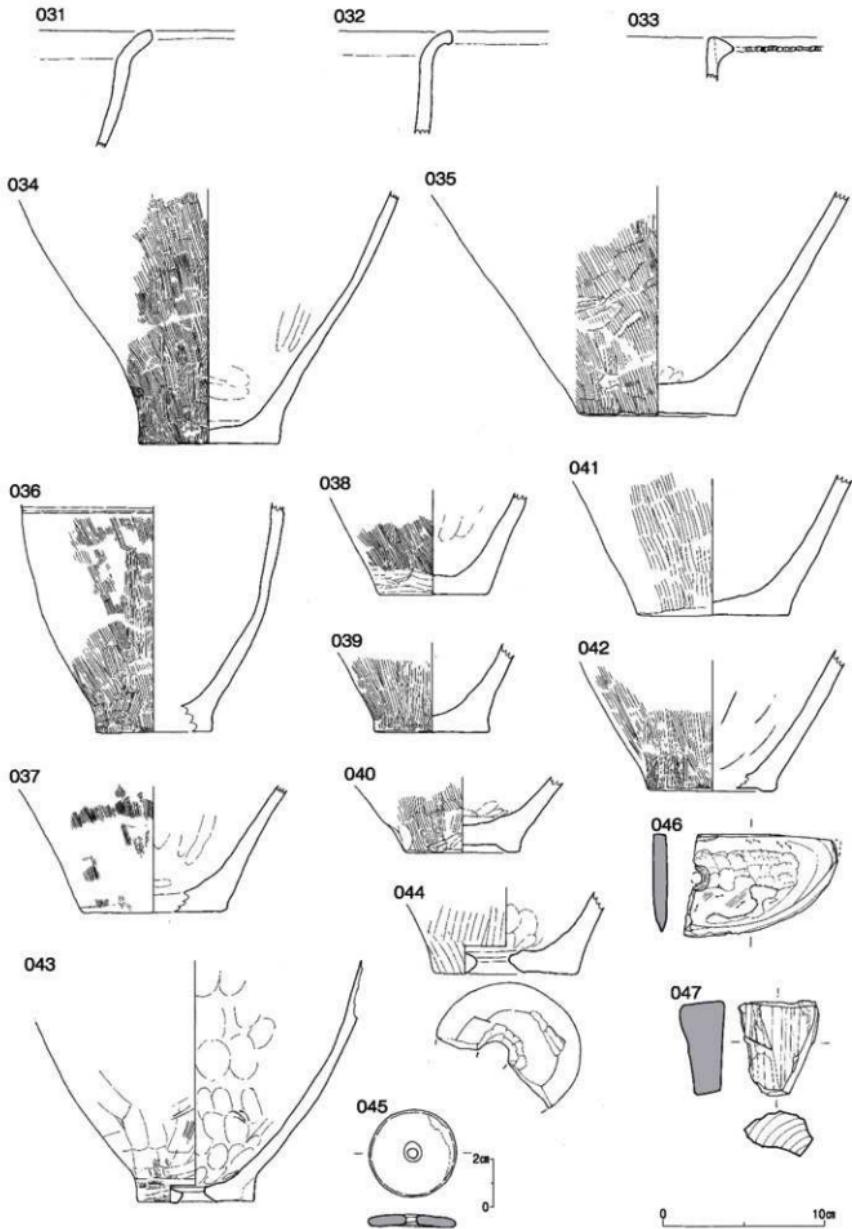
第6図 SK001 遺物実測図1 (1/3)



第7図 SK001遺物実測図2 (1/3)

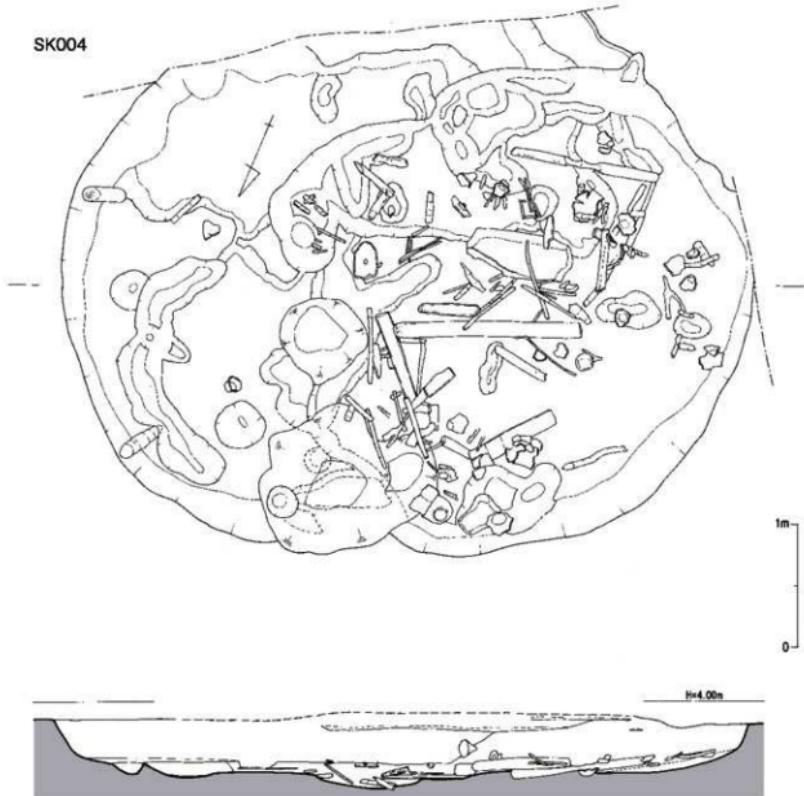


第8図 SK001 遺物実測図3 (1/3)



第9図 SK001遺物実測図4 (1/3・045は1/2)

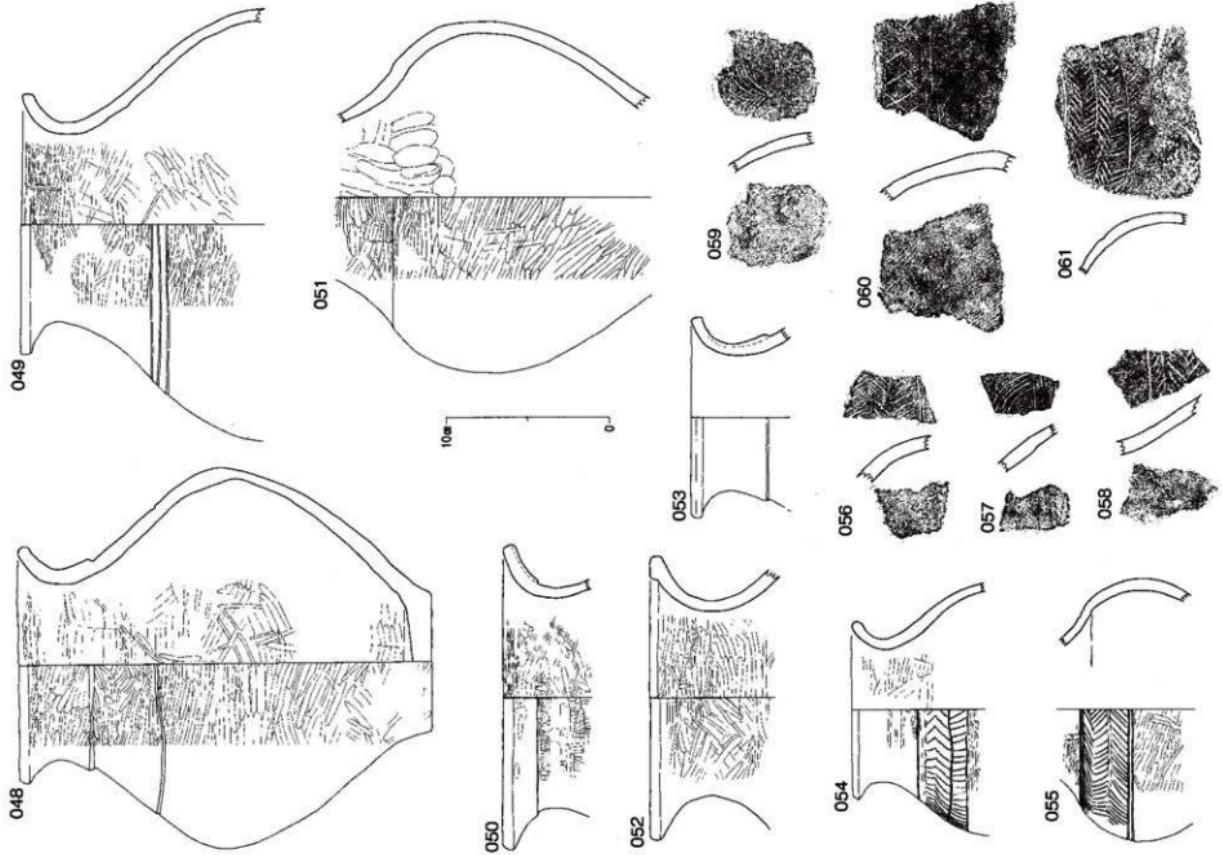
土した遺物はSK004・030に比べると少ない。遺構の平面は不整円形を呈し、直径は約6 mを測る。検出面からの深さは10～20 cmほどである。底面にはかなり凹凸があり、窪みの最も深い部分で深さ40 cm前後を測る。覆土は黒褐色を呈し、土層では貼り床は確認できなかつた。底面から10～15 cm上で多くの土器片が出土した。木片の出土は多いがほとんど小枝で、加工痕が確認されたのは047のみである。出土遺物（第6～9図001～047）。001～011は壺である。001は復元口径22.8 cmを測る。頸部に段があり、一部赤色顔料が残る。外面全体と内面の口縁部付近はミガキ、内面のほとんどはナデを施す。002は復元口径20.6 cmを測る。外面から口縁内部はミガキで、内面はハケ後一部ミガキを施す。003は復元口径22.4 cmを測る。頸部に1条の沈線があり口縁上面に羽状文を施す。004は復元口径18.8 cmを測る。口縁端断面が三角を呈す。005は肩部に段を持ち全体に横方向のミガキを施す。006は短頸壺で口縁直下に穿孔を施す。復元口径13.4 cmを測る。胴部内面はミガキを施す。007は壺底部で底径7 cmを測る。外面はミガキを施す。内面は不明。008～010は肩部に綾杉文・羽状文を施す。008は外面はミガキ、内面はナデを施す。009は外面がミガキ、内面はナデを施す。010は橙色～黒色を呈す。011、012は甕棺口縁である。011はにぶい橙色を呈し内面は横ハケ、外面は不明である。口縁端の刻み目は浅い。012はにぶい橙色を呈し、口縁端に刻み目を施す。甕棺は胴部片も出土したが、いずれも小片である。013、014は甕棺底部である。底径は013が16 cmで内外面ともハケ目、内底部は指と工具によるナデを施す。014は復元底径16.2 cmを測る。にぶい橙色を呈し、外面下端は綾ハケ後ナデ、内面はナデを施す。015、016は鉢である。015は復元口径27 cm、器高15.3 cmを測る。外面は一部不明瞭だがミガキ、内面は上半がナデ、過半がミガキである。016は復元口径26.8 cmを測り、灰黄褐色を呈す。調整は外面は不明、内面は口縁が横ハケで胴部は丁寧なミガキを施す。017～044は甕である。017は口径22.9 cm、器高26.1 cmを測る。橙色～灰黄褐色を呈し外面上半は綾ハケ、下端は横方向の擦痕、内面は口縁が横ハケ、胴部はユビナデを施す。018は口径22.6 cm、器高27.7 cmを測る。にぶい褐色を呈し、外面は綾ハケ、内面は口縁が横ハケ、胴部上半はナデ、下半には工具痕が残る。019は復元口径20.4 cm、器高22.3 cmを測る。020は復元口径22 cmを測る。外面は綾ハケ、内面は口縁が横ハケで頸部はユビナデを施す。021は口径22 cm、器高23.3 cmを測る。外面は綾ハケ、内面は上半は煤が残る。内面は全体に炭化物が付着している。022は復元口径22.1 cm、器高19.1 cmを測る。外面はハケ、内面は工具によるナデである。023は本来の口縁部を打ち欠く。現状の口径19.2 cmを測る。外面は粗いハケ、内面は工具によるナデである。口縁に沈線が巡る。024は復元口径27.2 cmを測る。外面は粗い綾ハケで口縁下に沈線が1条巡る。内面はユビナデを施す。025は復元口径20.8 cmを測る。外面は綾ハケ、内面はヘラナデである。026は復元口径23.6 cmを測る。外面は綾ハケで口縁下にはハケ後にナデを施す。内面は口縁が横ハケ、胴部はユビナデである。027は外面が綾ハケ、内面は口縁が横ハケ、胴部はユビナデを施す。029は全体がナデで、外面は煤が付着する。030は口縁下に突帯が着く。全体がやや丁寧な横ナデである。031は全体に丁寧なヘラナデを施し、口縁内面に煤が付着する。032は全体にヘラナデを施す。033は口縁が断面三角形の突帯状をなす。刻み目は浅く、全体にナデを施す。036は胴部に沈線を2条接して巡らす。復元底径は7 cmを測る。外面は綾ハケ、内面はナデで全体に炭化物が付着する。037は復元底径9 cmを測る。外面は綾ハケ、内面はナデで薄い炭化物が付着する。038は底径6.6 cmを測る。綾ハケで、底部直上は横方向のミガキを施す。内面はナデである。039は復元底径7.1 cmを測る。外面は綾ハケ、内面はナデで薄く炭化物が付着する。040は底径7.1 cmを測る。底面には高台が付き、上げ底状をなす。外面は綾ハケで一部ユビオサエの痕跡が残る。内面はユビナデである。041は復元底径9.2 cmを測る。外面は綾ハケを施し、内面は全体に薄く炭化物が付着する。042は復元底径8 cmを測り、やや上げ底状をな



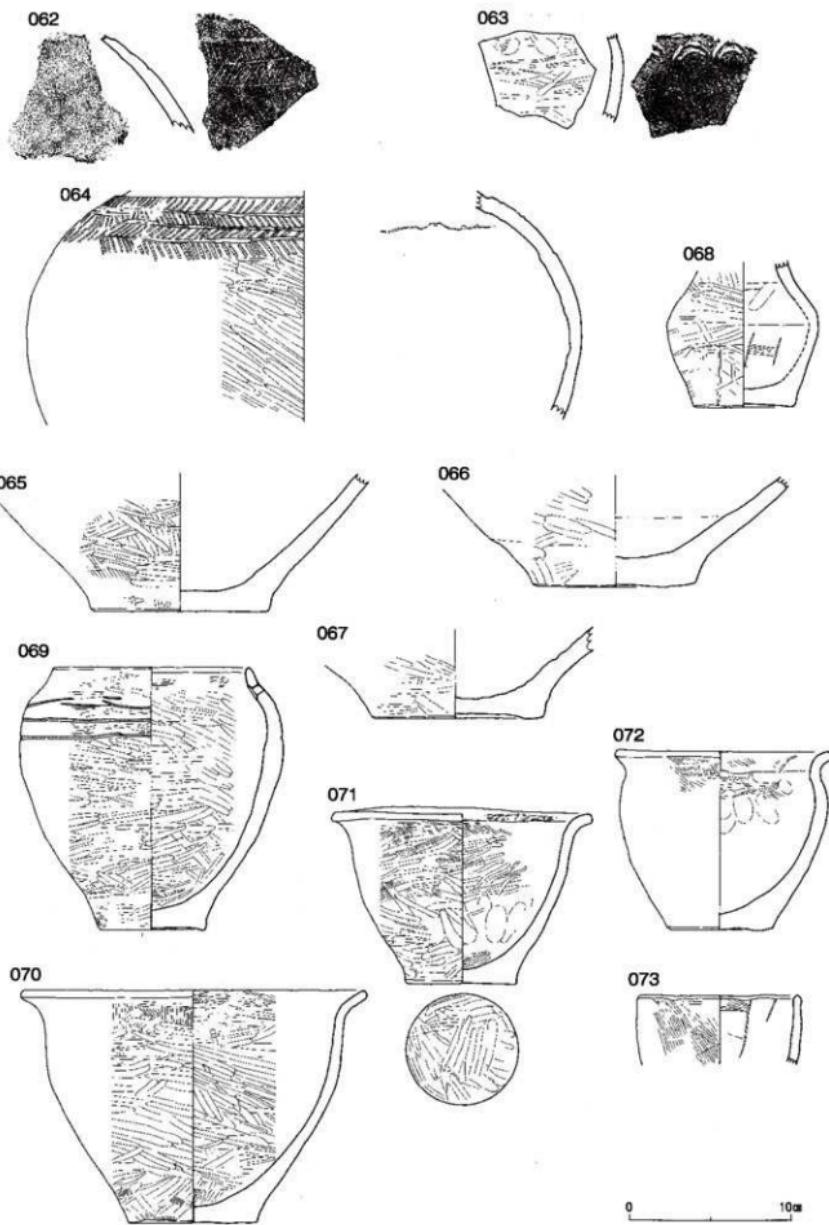
第10図 SK004 遺構実測図 (1/40)

す。外面は縦ハケ、内面はヘラナデを施す。043・044の底部には焼成後に穿孔を施す。043は復元底径7.2cmを測る。外面はヘラナデで底部直上は部分的にケズリがみられる。底面にもミガキを施す。内面は全体にユビナデを施す。044は復元底径8.8cmを測り、外面は縦ハケ、内面はユビオサエを施す。045は土製筋鋤車である。径3.6cm、厚さ5mm、重さ6.8gを測り灰白色を呈す。046は頁岩製の石包丁である。残存長9.4cm、厚さ9mmを測る。中央に両側から穿孔を施す。047は木片である。表面の1/2が割れ面だが、その他には整形痕が残る。小片で用途不明である。

SK004(第10図)調査区の中央南縁部に位置し、遺構の南端が調査区外に伸びる。平面は梢円形で、主軸はN-67°-Eを測る。長径5.7mを計り、短径は調査区内で4.4mを測る。底面の凹凸が著しい。遺構面からの深さは東側で35cm前後、西端には径1.8m程の円形の窪みがあり、東側に比べ15cm前後深い。埋土は黒褐色土粘質土で張り床は確認できなかった。西側の窪み部分で底面から5~15cmほど浮いた状態で多くの土器と植物遺存体が出土した。また遺構の東端で2本の杭が出土した。谷側に向いており、当初水門のような施設の一部と考えたが、掘り出してみると木質が新しく先端も銳利な

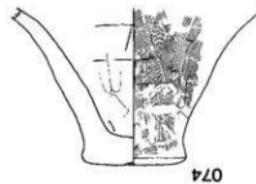
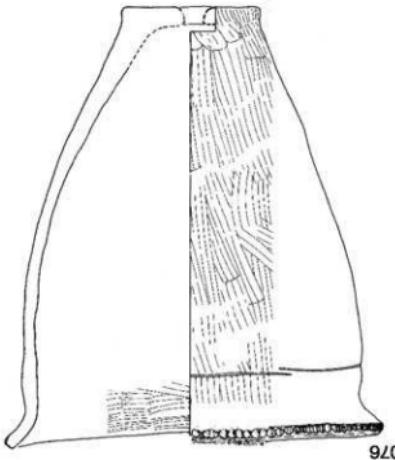
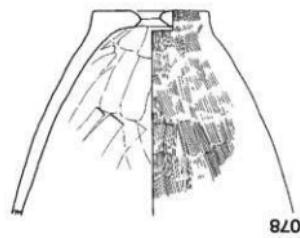
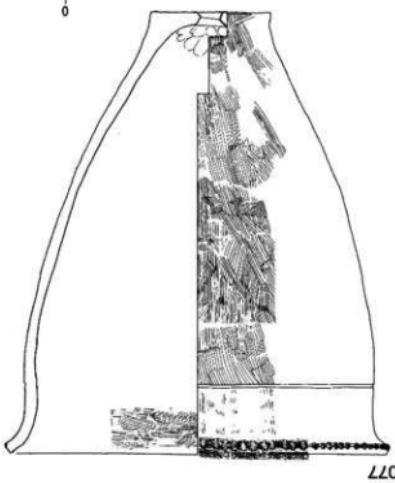
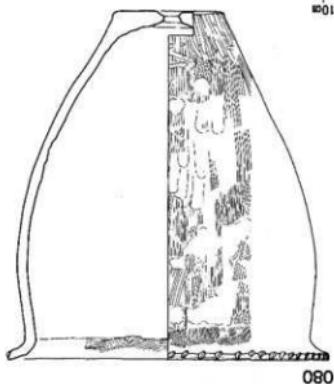


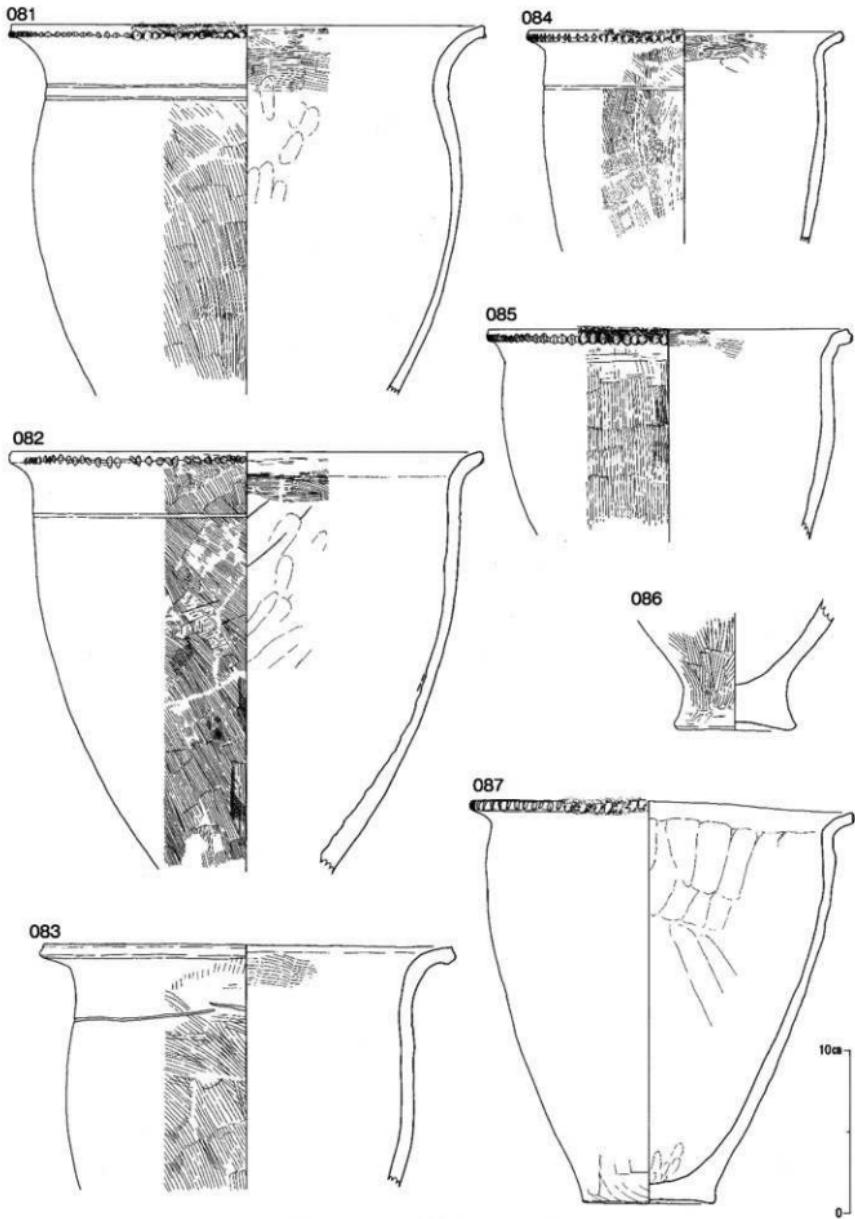
第11図 SK004遺物測定図1 (1/3)



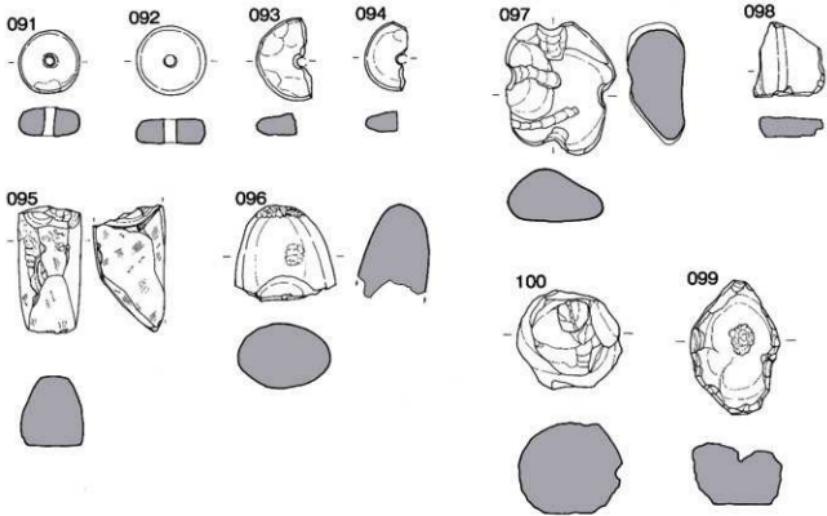
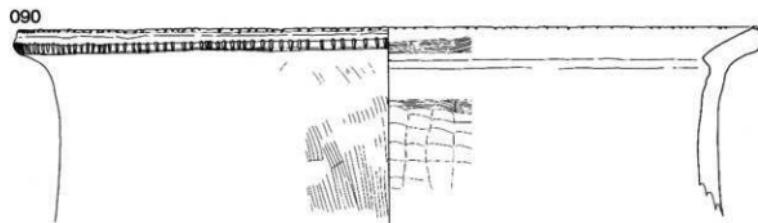
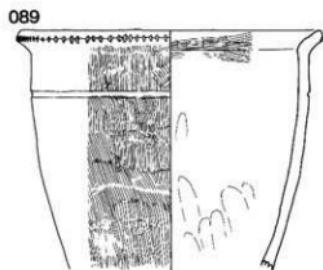
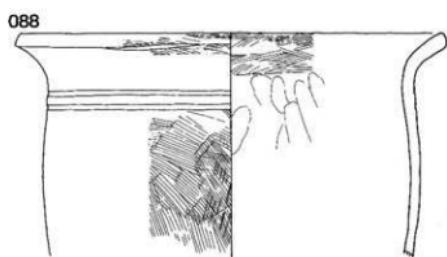
第12図 SK004遺物実測図2 (1/3)

第 13 圖 SK004 賽物美圖 3 (1/3)



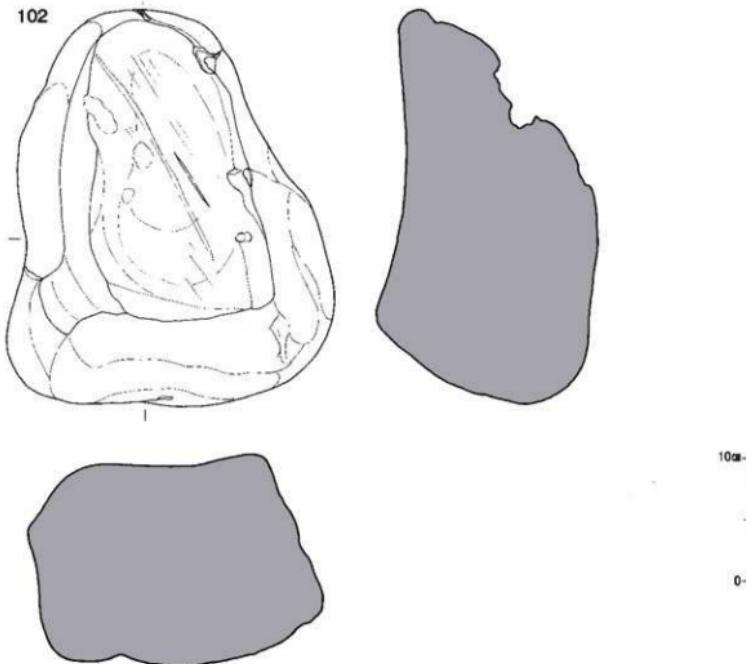


第14図 SK004遺物実測図4 (1/3)



0 10mm

第15図 SK004 遺物実測図 5 (1/3)

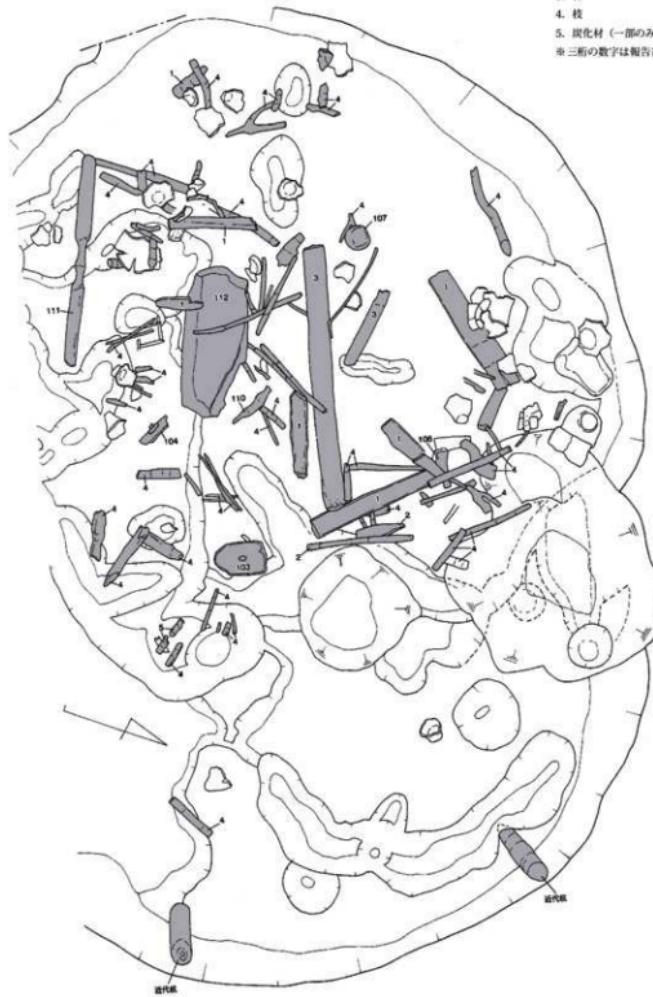


第16図 SK004 遺物実測図6 (1/4)

鉄製品で削っており、径も1区で検出した近代貯水池の護岸に使用していた木杭に似る。2本とも遺構の際に位置するのが気になるが、以前建っていた煉瓦造りの建物基礎を据える際にローム面まで掘り下げる際にはローム（黄橙色土）と遺構（黒色土）の違いは見えていたはずである。木杭は軟弱な遺構埋土部分の補強かもしれないが詳細は不明である。出土遺物（土器・石器第11～16図047～102

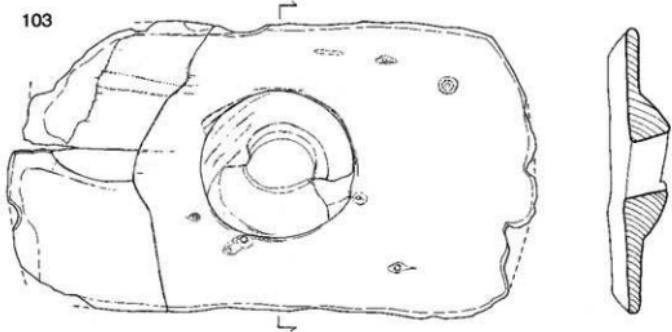
木製品 第17～20図103～112）。048～069は壺である。048は復元口径14.4cm、器高25.2cmを測る。灰黄褐色を呈し、黒斑がみられる。口縁下に段がつき、肩部に1条の沈線を巡らす。調整は全体にヘラミガキを施す。049は復元口径15.8cmを測る。肩部に3条の沈線を巡らす。全体にヘラミガキを施し、口縁にナデが少し残る。050は口縁下に段がつく。復元口径18.6cmを測る。051は口縁上面が平坦で厚みをもつ。復元口径17.2cmを測る。052は頸部に段を持つ。全体にナデを施す。復元口径12.2cmを測る。053は最大胴径21.5cmを測る。肩部に段を持つ。外面全体に細かなミガキを施す。054～064は頸部に沈線で羽状文・綾杉文を施す。065～067は壺底部で底径は10.6cmと9.9cm、10.3cmを測る。068は小型壺で底径6.1cmを測る。にぶい褐色を呈し、まばらなヘラミガキを施す。069は肩部から上を省いた短口壺と思われるが、他の壺とは胴部の張りが異なり、覗かれない。復元口径12cm、器高16cmを測る。外面はにぶい黄橙色から灰黄褐色を呈し、内面は灰白色を呈す。胎土は1～2mmの白色砂を多く含む他に雲母片、赤色粒を少量含む。外面はハケ後に横方向

1. 板材
 2. 加工痕あり
 3. 幹
 4. 枝
 5. 崩化材（一部のみ崩化も含む）
＊三桁の数字は報告書の遺物番号

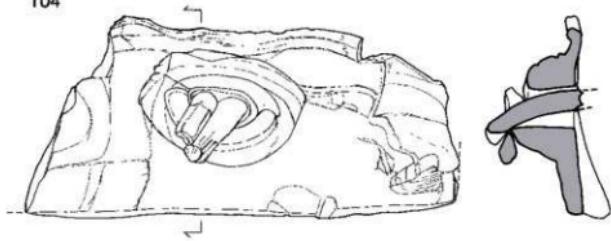


第17図 SK004木製品出土図(1/20)

103



104



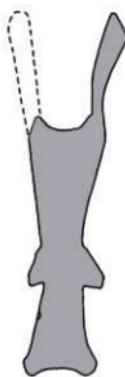
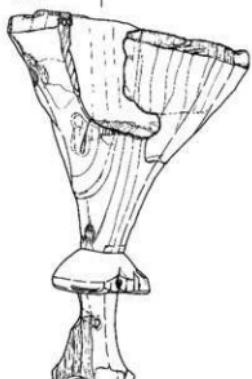
105



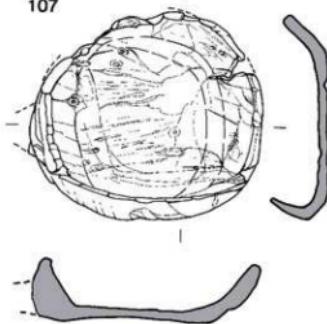
0 10mm

第18図 SK004 木製品実測図 1 (1/3)

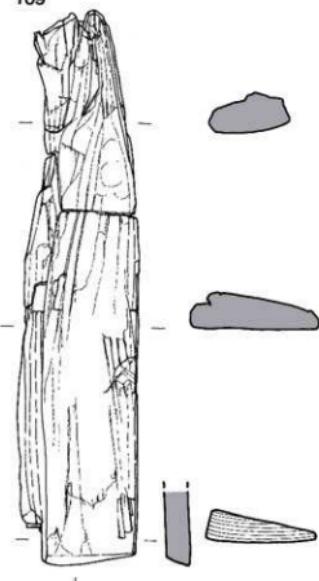
106



107



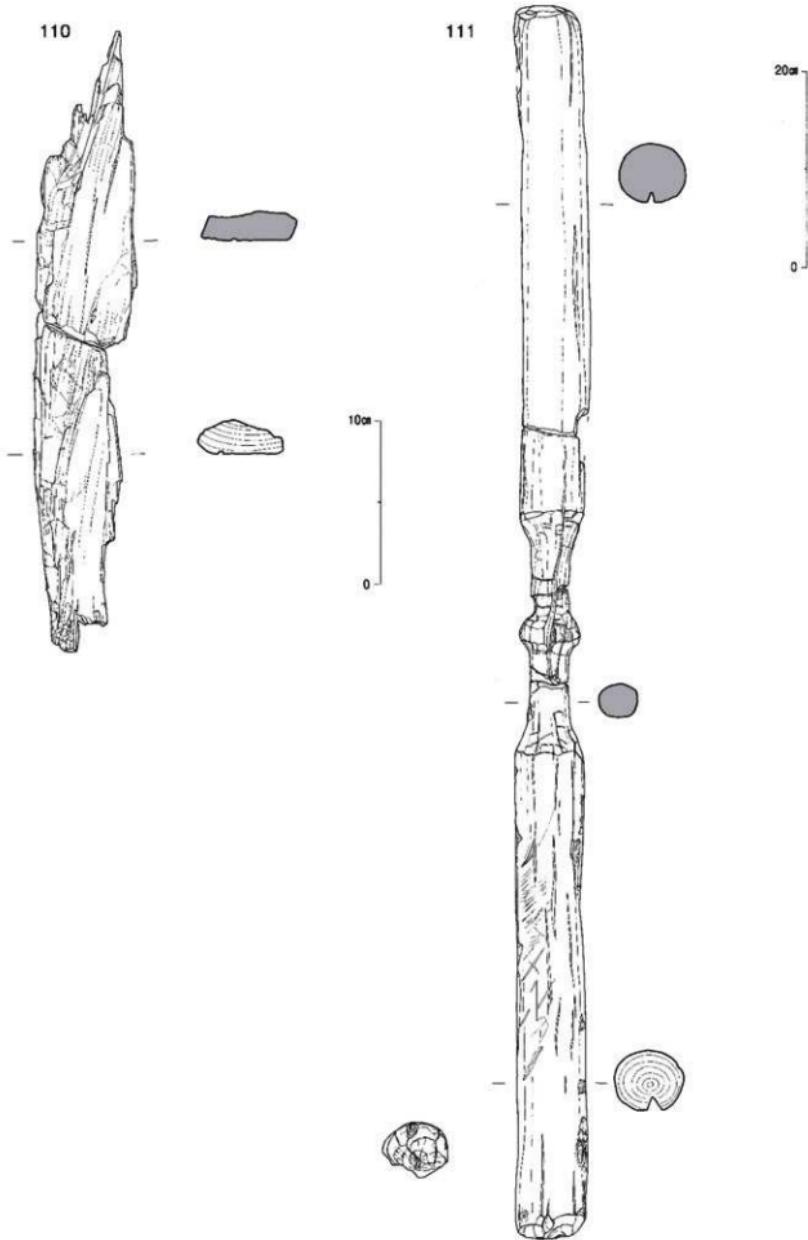
109



108

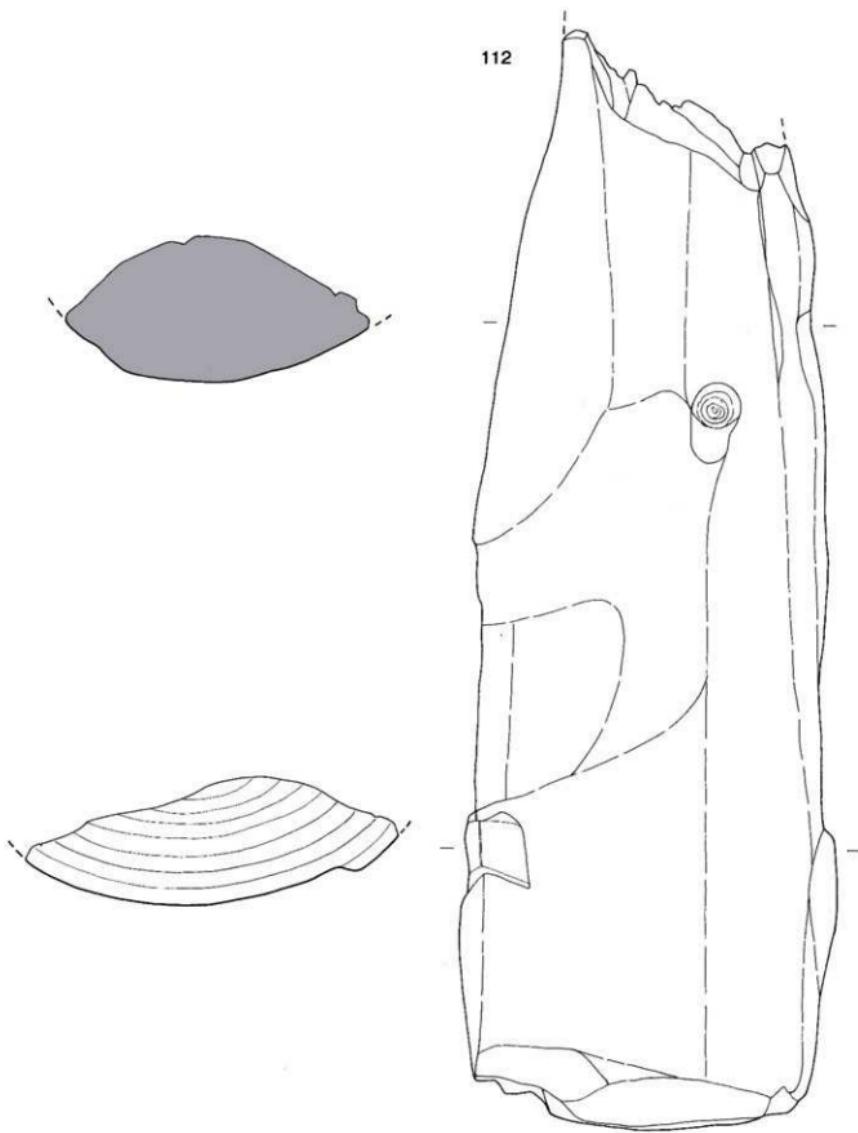


第19図 SK004木製品実測図2 (1/3)



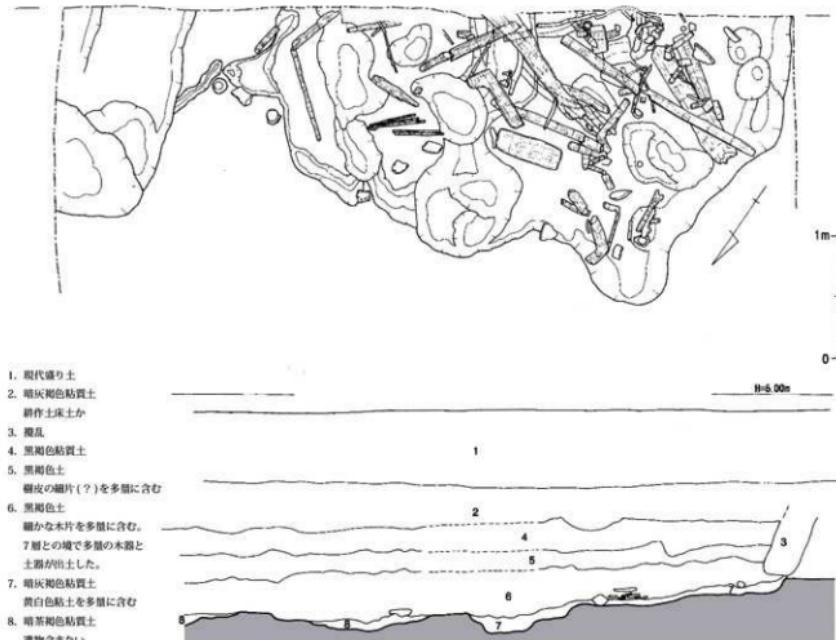
第20図 SK004木製品実測図3 (110は1/3・111は1/5)

112



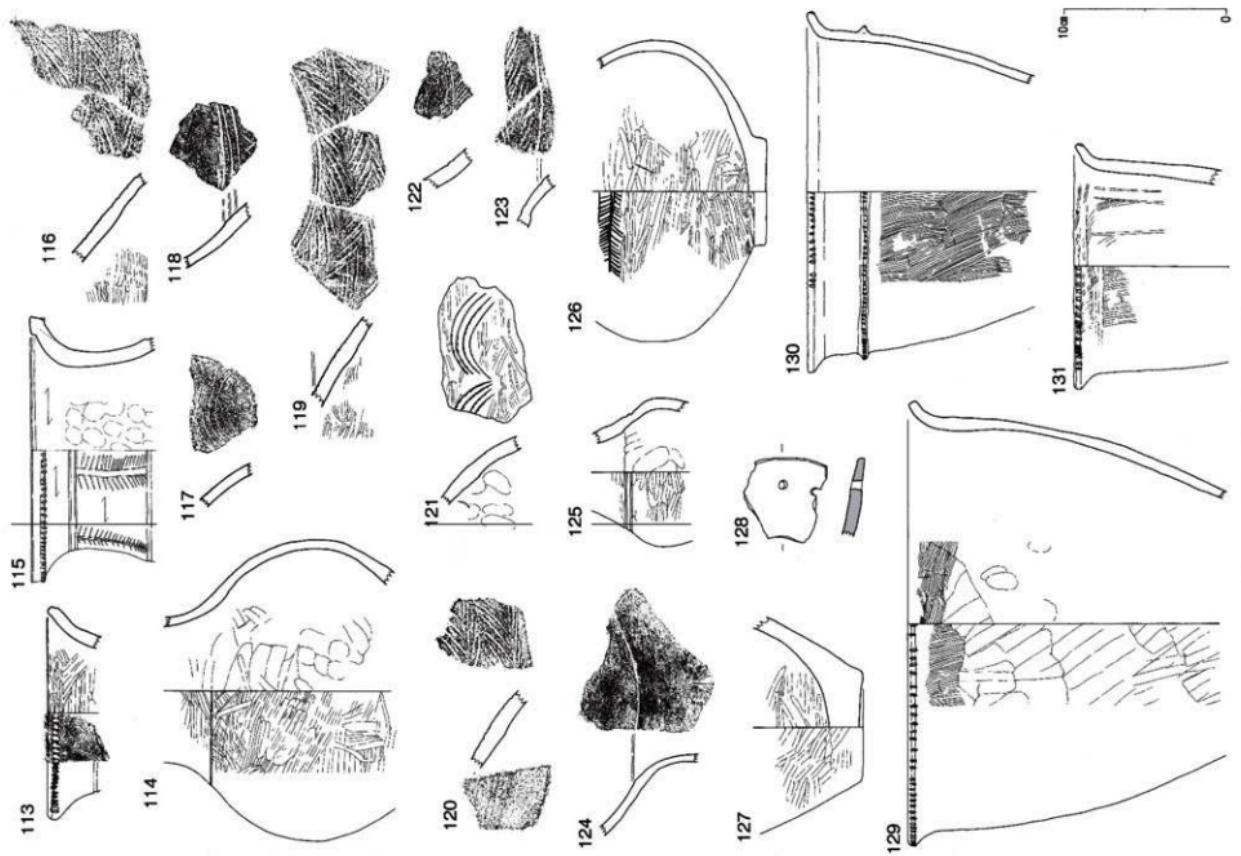
0 10m

第21図 SK004木製品実測図4 (1/4)



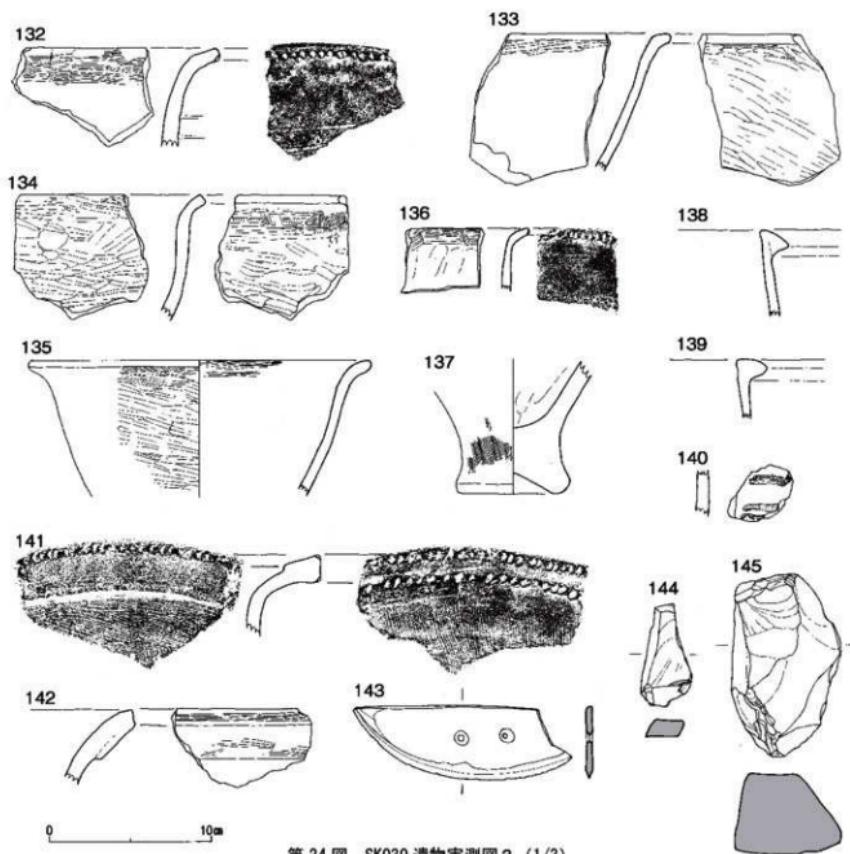
第22図 SK030 遺構実測図 (1/40)

のヘラミガキ、内面はヘラミガキで肩部と胴部の境界に3条の沈線を施す。下端の沈線の端部は交差する。上端の線は2cm程空いた部分を繋ぐような細い線が見られる。口縁端近く1.2cm離れて2個の穿孔を施す。対角線部は欠損しており不明である。070～073は鉢である。071は復元口径21.2cm、底径7.9cm、器高14.2cmを測る。外面にはぶい黄橙色から褐色を呈し、内面は全面黒色を呈す。内外面全体に丁寧なヘラミガキを施すが、一部にハケメが残る。外底部はナデである。胎土中に1～2mmの白色砂と雲母片を含む。071は口径15.9cm、底径6.8cm、器高10.8cmを測る。ほぼ完形である。外面は浅黄橙色、内面はぶい橙色を呈す。外面は継ハケ後横方向のヘラミガキを施すが、ヘラミガキは粗い。内面は外面に比べやや丁寧なヘラミガキである。外底部にもヘラミガキを施す。胎土は1～2mmの白色砂を多く含む他、雲母片と赤色粒を少量含む。072は復元口径13.2cm、底径6.6cm、器高10.9cmを測る。内外面ともにぶい黄橙色から灰黄褐色を呈す。外面は摩滅が著しいか口縁部にハケメが残る。内面はユビオサエの後ナデを施す。胎土は1～2mmの白色砂を多く含む。073は他の鉢と異なり、口縁が垂直に立ち上がり、復元口径10cmを測る。外面にはぶい黄橙色を呈し、内面は灰黄褐色を呈す。全体にハケメを施し、内面はハケ後にナデを施す。074・075は蓋である。074は上端径6.4cmを測る。外面は灰褐色を呈し、一部に黒斑が見られる。内面はぶい褐色を呈す。外面は



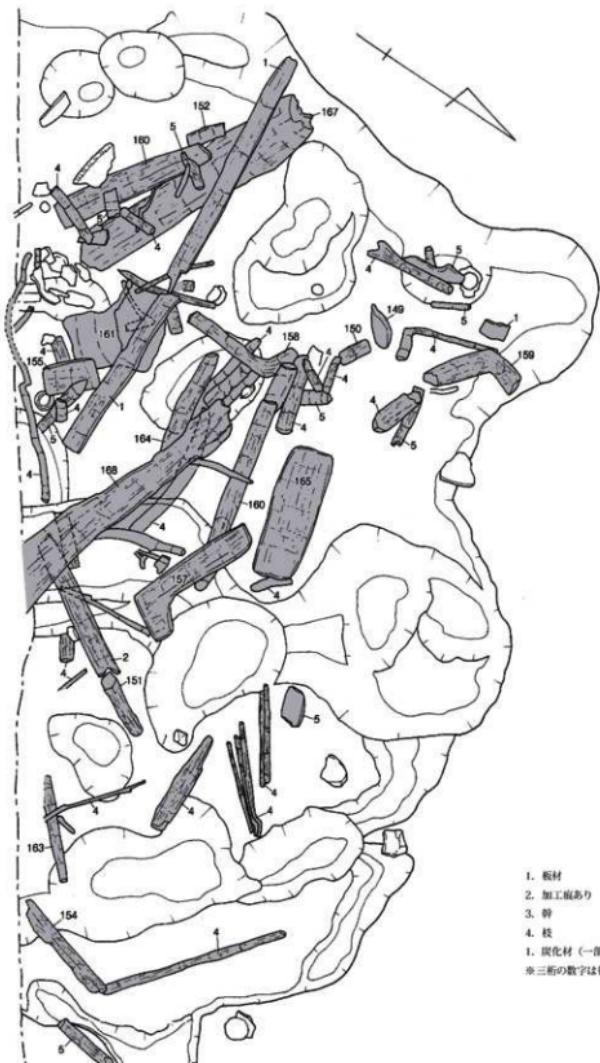
第23図 SK030遺物測量図1 (1/3)

縦ハケで上面はナデを施す。上端中央に径1cm、深さ1mm程の窪みが見られる。内面はハケ状工具での横ナデを施す。076～089は甕で076～080は底部中央に焼成後の穿孔がある。076は口径23cm、器高26.9cmを測る。底面中央に焼成後の穿孔がある。口縁下には沈線が1条巡り、沈線の端部は閉じない。外面はにぶい黄橙色～灰黄褐色を呈す。調整は外面が粗い縦ハケで胴部上半に薄く煤が付着する。内面は口縁が横ハケで胴部はナデを施す。胎土には1～3mmの砂を含む他、雲母片と赤色粒を少量含む。077は口径23.4cm、器高27cmを測る。口縁下に1条の沈線が巡る。調整は外面が縦ハケ、内面は口縁部が横ハケで胴部にはナデを施す。底部にはユビオサエの痕跡が残る。内面胴部下半と外面口縁下に薄く煤状のものが付着する。078は底径7cmを測り、焼成後中央に径1.2cmの孔を穿つ。外面に縦ハケ、内面に縦方向のナデを施す。外面全体に薄く煤が付着し、内面は底面から6cm上に帯状に煤状の付着物がある。079は底径8.8cmを測り、焼成後中央に径1.8cmの孔を穿つ。外面は細かな縦ハケで、内面はナデを施す。底部にはユビオサエの痕跡が残る。内面の一部に薄く付着物が見られる。胎土に1～3mmの白色砂を多く含む他、雲母片も少量含む。080は復元口径19.6cm、器高21.5cmを測る。口縁の1/4を欠く。外面は胴部に縦ハケ後ナデ、底部直上に縦方向のミガキを施し、内面は口縁に横ハケ、胴部には横ハケを施す。外面上半には煤が付着し、内面は中央部付近に焦げ付きが付着する。081は復元口径29.1cmを測る。頸部に2条の沈線を巡らす。外面は口縁下側が横ナデ、胴部には縦ハケを施し、内面には口縁に横ハケ、胴部にはナデを施す。一部にユビオサエの痕跡が残る。胎土は1～2mmの白色砂を多く含む他、雲母と赤色粒を少量含む。外面口縁下には煤が付着し、内面の胴部中央からやや上の部分に焦げ付きが付着する。082は復元口径29cmを測る。頸部に沈線1条を巡らす。内外面とも灰黄褐色から暗灰黄褐色を呈し、外面は斜め方向のハケ、内面は口縁が横ハケ、胴部にナデを施す。胎土は1～2mmの白色砂を多く含む他、雲母片と角閃石を少量含む。083は口径25.3cmを測る。頸部に沈線が1条巡る。沈線の端部は閉じない。内外面とも灰黄褐色から褐灰色を呈し、外面は沈線から上はハケ後ナデ、下側はハケを施し、内面は口縁部に横ハケ、胴部には板状工具によるナデを施す。胎土は1mm程の白色砂を含む他、雲母片も少量含む。084は復元口径19.4cmを測る。頸部に沈線が1条巡る。外面は縦ハケ、内面は口縁部に横ハケ、胴部はナデを施す。085は口径22.5cmを測る。外面は橙色からにぶい黄橙色、内面はにぶい黄橙色から灰黄褐色を呈し、外面下半には煤が、内面全体に焦げ付きが付着する。調整は外面が縦ハケ、内面は口縁部に横ハケを施す。内面胴部は焦げ付きのため不明である。086は復元底径7.4cmを測る。外底部はやや上げ底状を呈す。外面はにぶい橙色、内面は灰黄褐色から黒色を呈し、外面は粗い縦ハケ、内面はナデを施す。内面全体に薄く焦げ付きが付着する。087は復元口径23.4cm、器高24.6cmを測る。口縁端に刻み目を施す。外面は褐灰色からにぶい黄褐色で胴部中央に径6.5cmの黒斑がある。内面はにぶい黄褐色から黒褐色を呈す。調整は外面がヘラナデで内面はユビナデを施す。胎土は0.5～1mmの白色砂を多く含む他、1～3mmの白色砂と雲母片、角閃石を少量含む。外面は口縁下に薄く煤が付着し、内面は口縁と口縁下6cmを除いて焦げ付きが付着する。088は復元口径26.2cmを測る。頸部に幅3mmの沈線を2条巡らす。外面はにぶい黄橙色から灰黄褐色で胴部に黒斑が見られる。内面はにぶい黄橙色を呈す。外面は沈線から上がナデ、胴部は斜め方向のハケを施し、内面は口縁がハケ後横ナデ、胴部にはナデを施す。胎土は0.5mmから1mmの白色砂を多く含む他、褐色粒と雲母片を少量含む。089は復元口径18.8cmを測る。頸部に沈線1条を巡らす。内外面ともにぶい黄橙色から暗褐色を呈す。調整は外面が縦ハケ、内面は口縁部が横ハケ、胴部はユビナデを施す。内面胴部下半の一部に焦げ付きが薄く残る。090は甕棺である。破片は胴部も含め多く出土したが、接合しなかつた。復元口径は45.6cmを測る。口縁は粘土帶を貼り付けて厚みを持たせ、端部には刻み目を施す。色調は外面が灰白色、内面がにぶ



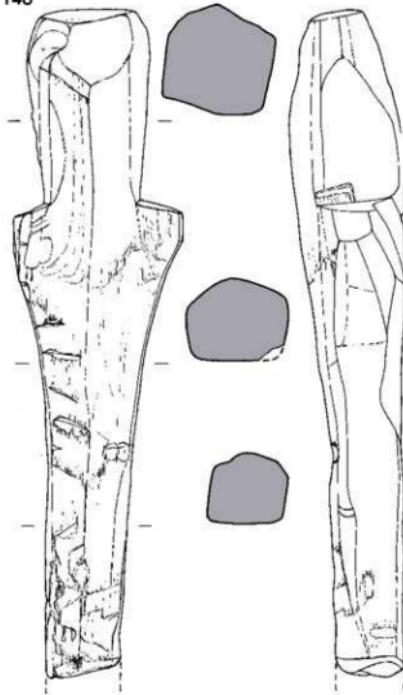
第24図 SK030 遺物実測図2 (1/3)

い黄橙色を呈す。調整は外面がひヶ後横ナデ、口縁上面は横ハケを施す。内面は口縁直下は横ナデで、下は縦方向にナデたのち、横ナデを施す。胎土は1~2mmの白色砂を多く含む他、雲母片を少量含む。091~094は土製紡錘車である。091は径3.8cm、厚さ1.8cm、重さ28.6gを測り、にぶい黄橙色を呈す。胎土は1mm程の白色砂と雲母片を少量含む。092は径4.2cm、厚さ1.5cm、重さ30.6gを測り灰白色を呈す。中央の孔は径6.5~7mmを測る。胎土は径1mmの白色砂の他に角閃石と赤色粒を少量含む。093は径5.0cm、厚さ1.3cmを測り、にぶい黄橙色を呈す。中央の孔の径は5.5mmを測る。胎土は1~3mmの白色砂の他に雲母片を含む。094は径4.1cm、厚さ1.2cmを測り、暗黒褐色を呈す。中央の孔の径は6mm程である。胎土は径1~3mmの白色砂を多く含む他、雲母片を少量含む。095は柱状片刃石斧である。灰白色で表面に白い線がみえ堆積岩系である。残存長7.7cm、幅3.8cm、高さ4.3cmを測る。全体に丁寧な研磨を施している。刃先に刃こぼれが見られる。096は玄武岩製の敲石である。

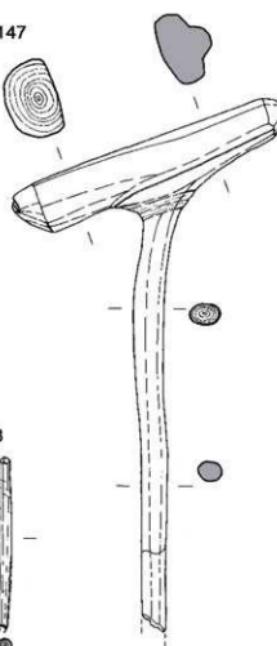


第25図 SK030 木製品出土図 (1/20)

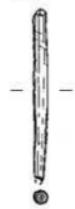
146



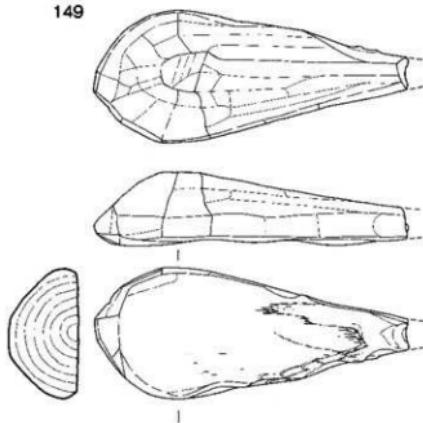
147



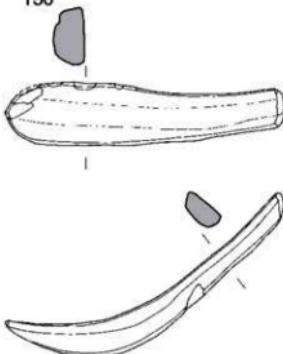
148



149



150

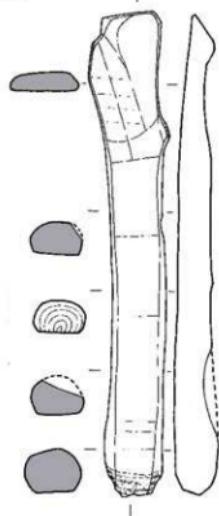


第26図 SK030木製品実測図1 (1/3)

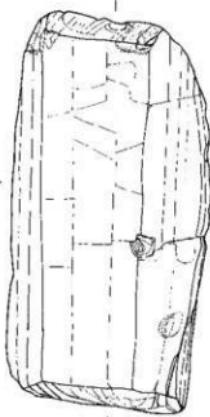
遺存長5.8cm、幅6.1cm、厚さ4.3cmを測る。先端と両側面に敲き痕が見られる。097は花崗岩製の石錘である。長さ8.1cm、幅6.7cm、厚さ3.5cm、重さ205gを測る。自然碟の四方に抉りを入れている。098・099は砂岩製の砥石である。098は遺存長4.6cm、幅4.3cm、厚さ1.2cmを測る。上面1面のみを砥面としている。099は長さ8.2cm、幅5.5cm、厚さ3.8cmを測る。上下両面を砥面としている。また、上面中央に窪みがあり、砥石として使用後は凹石として使用している。100は花崗岩製の敲石である。径は6.4×6.0×5.5cmでやや扁平な球体を呈する。重さ286gを測る。102は長さ32.5cm、幅26.9cm、厚さ17.4cm、重さ約17.5kgを測る。上面の一面が摩滅している。砥石もしくはドングリ等を掘り潰す為の捕鉢などに使用されたものと思われる。木製品（第18～20図 103～111）。第17図の遺物出土状況に見られるように植物遺存体の出土数は多いものの、そのほとんどは径5cm以下の枝で加工痕は見られない。枝は木製品に使用する木の枝払い落とされたものか、ただ近隣に生えていた木の枝が落ちたものだろうか。それとも燃料等に使用するため集落内に持ち込まれたものであろうか。103は鍤である。現状で長さ32.3cm、幅18cmを測る。両端の刃部が丸いのは使用したためか。104は机である。現状で幅26.5cm、高さ12.3cmを測る。柄として径1.5cmの2本の枝が着装されている。柄の径が細く、孔との間に隙間がある。105は竹製で遺存長10.5cm、幅1.8cmを測り、表面側は未加工で内側を平坦に加工している。106は木製高杯である。高さ22.7cmを測る。杯部口縁の平面は梢円形なのは土圧でつぶれたのか。現状で口縁長径は14.3cmを測る。柄と杯部の境にスカート状の突帯がつく。馬上杯を思わせる形状である。全体に整形が粗く未製品と思われる。これまで比恵遺跡や里田原遺跡（平戸市）、原の辻遺跡（志岐市）などで出土した類品には漆で彩色されており、本製品も完成した場合は漆が塗られた可能性もある。107は柄杓の皿部分である。柄は折れて痕跡のみが残る。土圧でやや歪むが、現状で口径13.5×cm、高さ3.9cmを測る。108は板状の加工材の破片で、遺存長33.4cm、遺存幅8cm、厚さは最大で1.8cmを測る。109も板状を呈し遺存長33.6cm、遺存幅7.3cmを測る。図の下端は切断されており、左側には抉りが入る。建築材であろうか。110は板材で両端が炭化している。端材を焚き物としている。111は堅杵である。長さ125.8cm、最大径7.1cmを測る。木の芯部を使用している。112は加工材である。遺存長89.8cm、幅31cm、厚さ12cmを測る。幹の外側部分を使用しており断面菱形を呈す。004からは彩色を施した壺が1点出土した。触ると赤色顔料が落ちるため実測できず、現在クリーニング中である。写真のみ図版4の7に載せる。

SK030（第22図）調査区東端の谷中に位置する。平面形は梢円形を呈すると思われるが、遺構の南半が調査区外に伸びるため詳細は不明である。現状で東西435cm、南北で約2mを測る。底面はSK001・004同様凹凸が多く見られる。八女粘土面からの深さは20cm前後であるが、本来は谷がある程度埋没した状態から掘り込んだものと思われる。ただ、調査区南壁上層では遺構東側の立ち上がりは確認できず谷部に向けて開口していた可能性も考えられる。遺物の多くは底面から5～10cmほど浮いた状態で出土した。SK004と異なり大型の土器片は少なく、植物遺存体が遺物のほとんどを占める。植物遺存体は木製品の未製品と板材などの加工材、端部もしくは全体が炭化した木材、樹皮が残る枝等で最も多く出土したのは樹皮が残る枝である。出土遺物（第23～31図113～168）。113～127は壺である。113は口縁部で復元口径12.3cmを測る。頸部に沈線を巡らし、壺口縁には珍しく端部に刻み目を施す。外面は灰黄褐色からぶい黄橙色、内面は灰白色を呈す。調整は外面が横ナデ、内面はミガキを施す。114は胴部最大径の復元径が18.4cmを測る。肩部に沈線が3条巡る。色調は外面がぶい橙色から灰褐色、内面はぶい橙色を呈す。調整は外面は沈線から上は横方向のヘラミガキ、胴部はハケ後やや雑なヘラミガキを施す。内面は頸部から胴部上半がヘラ状工具によるナデで胴部下半はユビオサエやユビナデの痕跡が見られる。胴部上面で黒ずみが残っており、当初は黒色顔料が塗布

151



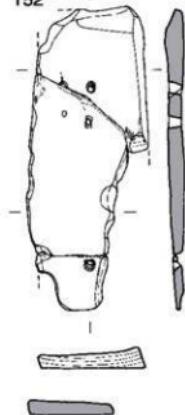
155



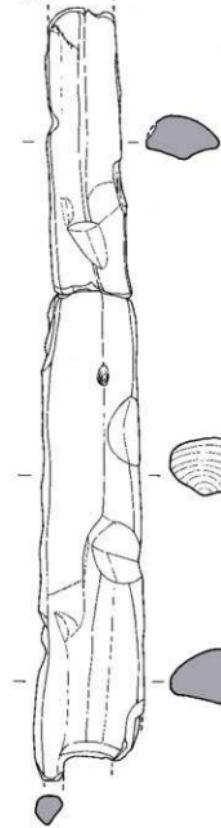
10cm



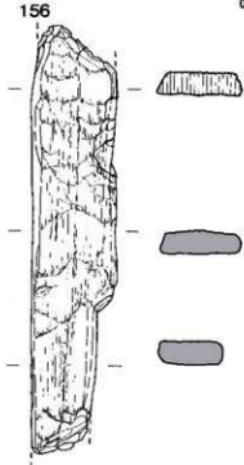
152



154



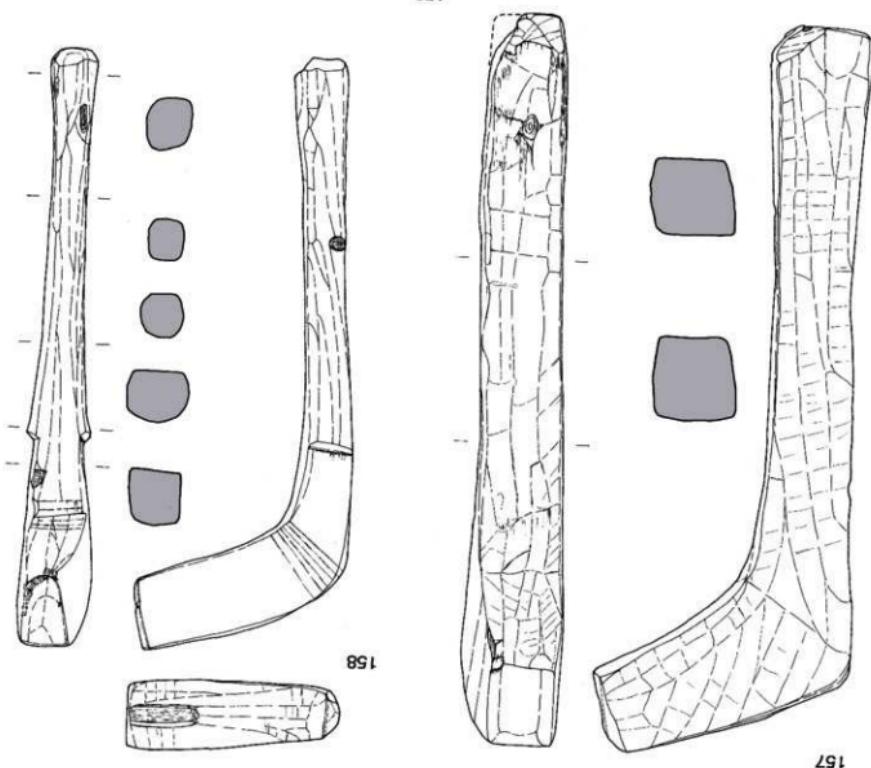
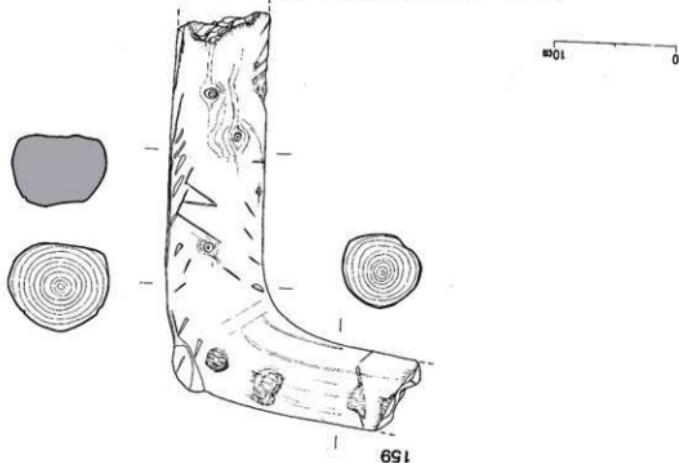
156



0

第27図 SK030木製品実測図2 (1/3)

第28圖 SK030木製品實測圖3 (1/4)

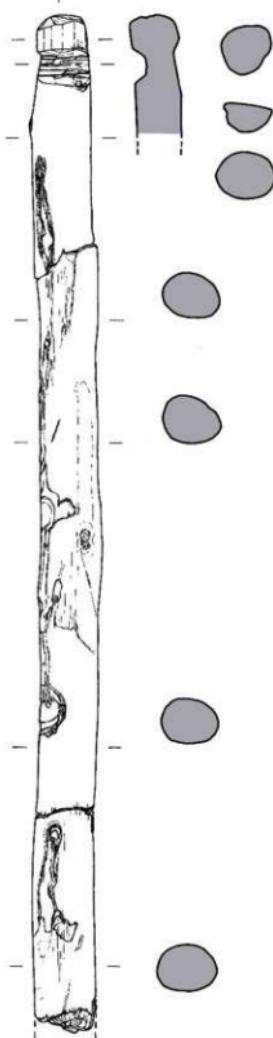


157

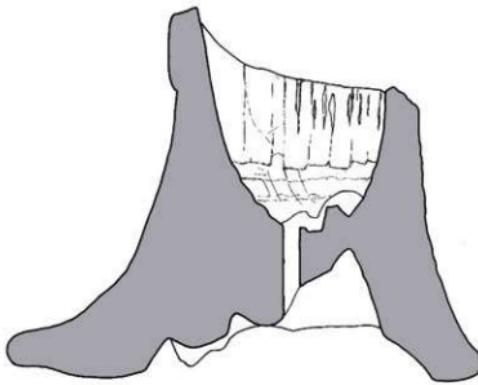
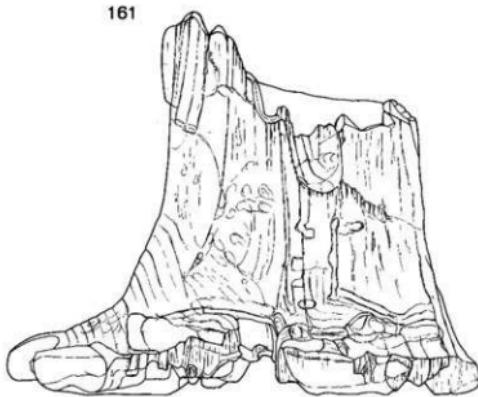
158

159

160

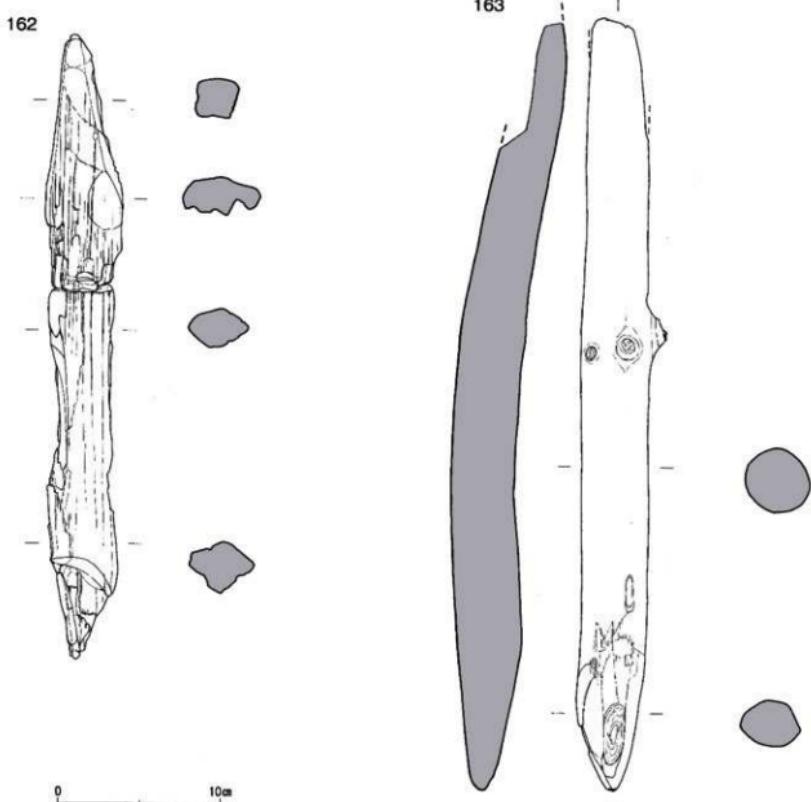


161



0 10cm

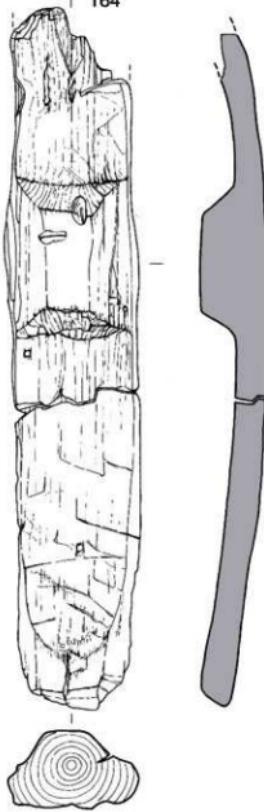
第29図 SK030木製品実測図4(1/4)



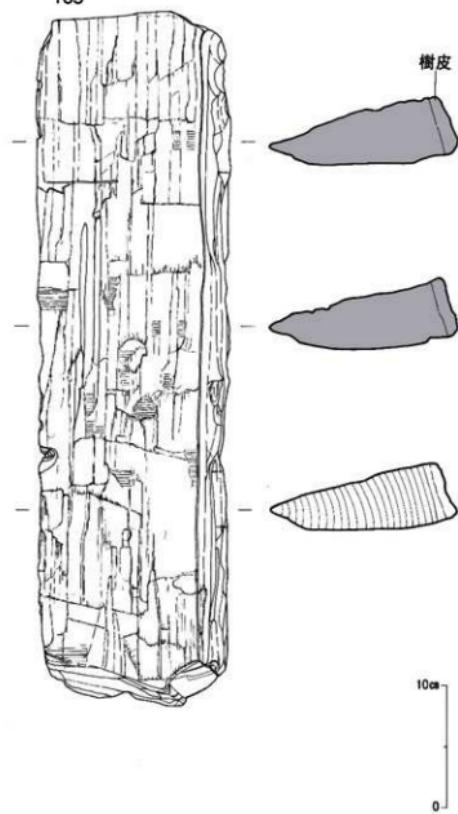
第30図 SK030 木製品実測図5 (1/3)

されていた可能性がある。胎土は1~2mmの白色砂を多く含む他、雲母片を少量含む。115は復元口径16.2cmを測る。口縁は粘土を貼り付けて厚みをつけ、上面は平坦をなす。端部には刻目を施す。頸部に2条、肩部に2条以上の沈線を巡らし、その間を縦線2本の沈線とそれから左右に開く横線で結ぶ。縦線は遺存部分で2カ所に描かれており、全部で6カ所に描かれていたと考えられる。外面は赤色顔料がわずかに残る。調整は外面が横方向のミガキ、内面は口縁部は横方向のミガキで頸部から下はユビオサエの痕跡が残る。胎土は3mm以下の白色砂を多く含む。116~123は壺の肩部で、沈線による羽状文等が見られる。124は壺肩部である。外面は黒色顔料の痕跡が残る。調整は外面がミガキ、内面はナデを施す。胎土は白色砂と雲母片を含む。125は小型壺の肩部から胴部である。内外面とも灰黄褐色を呈す。調整は外面が横方向のミガキ、内面は頸部が横ナデ、胴部はユビによる縦方向のナデを施す。外面肩部に2条の沈線を施す。126は復元による胴部最大径が18.4cmを測る。外面はにぶい黄橙色、内面は灰白色からにぶい黄橙色を呈す。調整は内外面とも横方向のヘラミガキである。

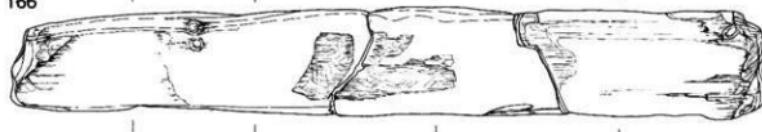
164



165

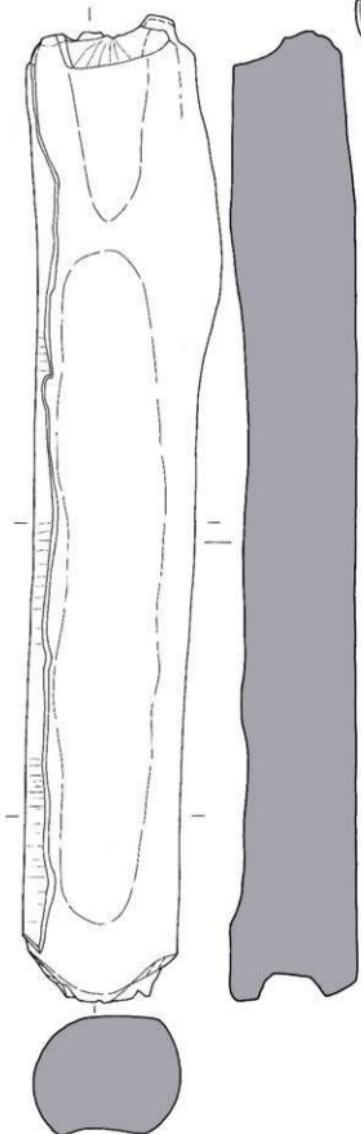


166

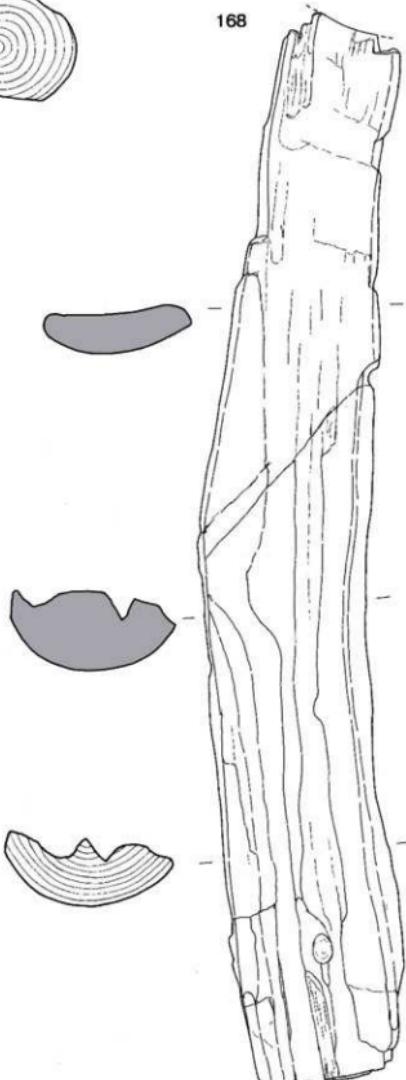


第31図 SK030木製品実測図6(1/4)

167



168

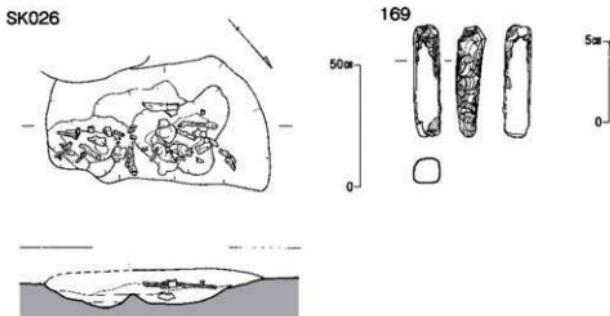


0 10cm

第32図 SK030木製品実測図7(1/5)

肩部には沈線で綾杉文を描く。外面の一部には黒ずみがみられ、綾杉文の沈線内には赤色顔料が残るため、全体に黒色顔料を塗布し、綾杉文は赤く彩色していたものと思われる。127は壺の底部と思われる。他の底部に比べ底部からの立ち上がりが急である。外面は浅黄橙色、内面は灰白色を呈し、両面にヘラミガキを施す。128は蓋の一部である。外面は光沢がある黒色、内面は灰黄褐色を呈し、両面にナデを施す。端部から1.5cm離れて径5mmの孔を2個穿つ。胎土は1~3mmの白色砂と雲母片を含む。129から140は甕である。129は復元口径27.2cmを測る。外面にはぶい黄橙色から灰黄褐色を、内面は灰黄褐色から黒褐色を呈す。内外面とも口縁部はハケで、胴部は板状工具によるナデを施す。130は復元口径22cmを測る。内外面とも灰黄褐色から黒色を呈し、内面と外面口縁は横ナデ、外面胴部は継ハケを施す。胎土は1mmの白色砂と雲母片を含む。131は復元口径15cmを測る。外面は灰黄褐色から褐灰色、内面は黒褐色を呈し、外面はハケ、内面はナデを施す。外面口縁部から内面にかけて煤状の付着物がある。132は両面ともにぶい褐色を呈し、口縁下に2条の沈線を巡らす。内面白縁部が横ハケの他はナデを施す。外面の沈線と刻み目の下に煤が付着する。133は外面かにぶい黄橙色で全面ミガキ、内面は灰褐色で口縁下にわずかにミガキがある他はナデを施す。134は外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色を呈す。調整は外面が継ハケ後に横方向のミガキ、内面は横方向のミガキである。胎土は0.5~1mmほどの白色砂と雲母片を含む。135は復元口径21cmを測る。内外面とも灰黄褐色を呈す。外面は継ハケ後横方向のミガキ、内面は口縁が横ハケ、あとは丁寧なナデを施す。胎土は1mm大の白色砂を多く含む他に赤色粒と雲母片を少量含む。136は如意状の口縁で口縁端に刻み目を施す。内外面ともにぶい褐色で、外面には薄く煤が付着する。調整は内外面ともナデを施す。胎土は0.5~1mmの白色砂と雲母片を含む。137は甕底部で底径7cmを測る。外面はにぶい橙色、内面は黒色を呈す。外面は摩滅が著しいが一部に継ハケが残る。内面はユビナデである。胎土は1~3mmの白色砂を多量に含むと他に雲母片を少量含む。底面が上げ底状で中期初頭に属する。138は口縁断面が三角形を呈す。外面は灰褐色で薄く煤が付着する。内面はにぶい黄褐色を呈す。全面に横ナデを施す。胎土は1~2mm大の白色砂と雲母片を少量含む。139は口縁断面が二等辺三角形を呈す。外面はにぶい黄褐色で口縁突堤の下面に煤が付着する。内面はにぶい黄橙色を呈す。全体に横ナデを施す。胎土には1~2mmの白色砂と雲母片を少量含む。138・139は中期初頭に属する。140は甕胴部か。外面はにぶい橙色、内面は灰褐色を呈す。調整は内外面ともナデを施す。胎土は1~2mmの白色砂と雲母片を少量含む。外面に黒色顔料による線が4条みられる。中央よりの2本は輪郭も明確で墨書状である。141・142は大型甕口縁である。141は口縁の上側に粘土帶を貼り付け厚くして上下両端に刻み目を施す。外面は刻み目の間は横ナデで、頸部は粗い継ハケを施す。内面は横ハケである。内外面とも灰黄褐色を呈す。胎土は1~2mmの白色砂と雲母片、赤色粒を含む。142は口縁の外側に粘土帶を貼り付けている。外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈す。調整は外面口縁は横ハケ後ナデ、内面はナデを施す。胎土は1~2mmの白色砂と雲母片を含む。143は貞観製の石包丁である。遺存長13.4cm、高さ4.5cm、厚さ4mmを測る。2つの穿孔は両側から穿っている。144は砥石である。石材は非常に細かな砂岩で4面を砥面とする。145は安山岩で敲石と思われる。長さ113cm、幅7cm、重さ605gを測る。

146は石斧の柄未製品である。柄は根元を欠く。遺存長41.2cmを測る。全体的に成形が粗い。147は片刃石斧の膝柄で根元部分を欠く。石斧装着部長17.9cm、柄の残長27.3cmを測る。装着部は両端とも削って尖らせている。148は棒状木製品である。遺存長10.8cm、径8mm測る。継方向に削っており断面は綴い八角形を呈す。149・150は匙の未製品である。149は粗い成形中で柄の先端を欠く。遺存長19.5cm、幅8.1cmを測る。150は長さ19cm、幅3.9cmと細身である。長軸方向に削っており、先端を尖らす。151は鎌の柄か。長さ30.7cmを測る。鎌装着部に抉りが入る。完成品か。152は板状

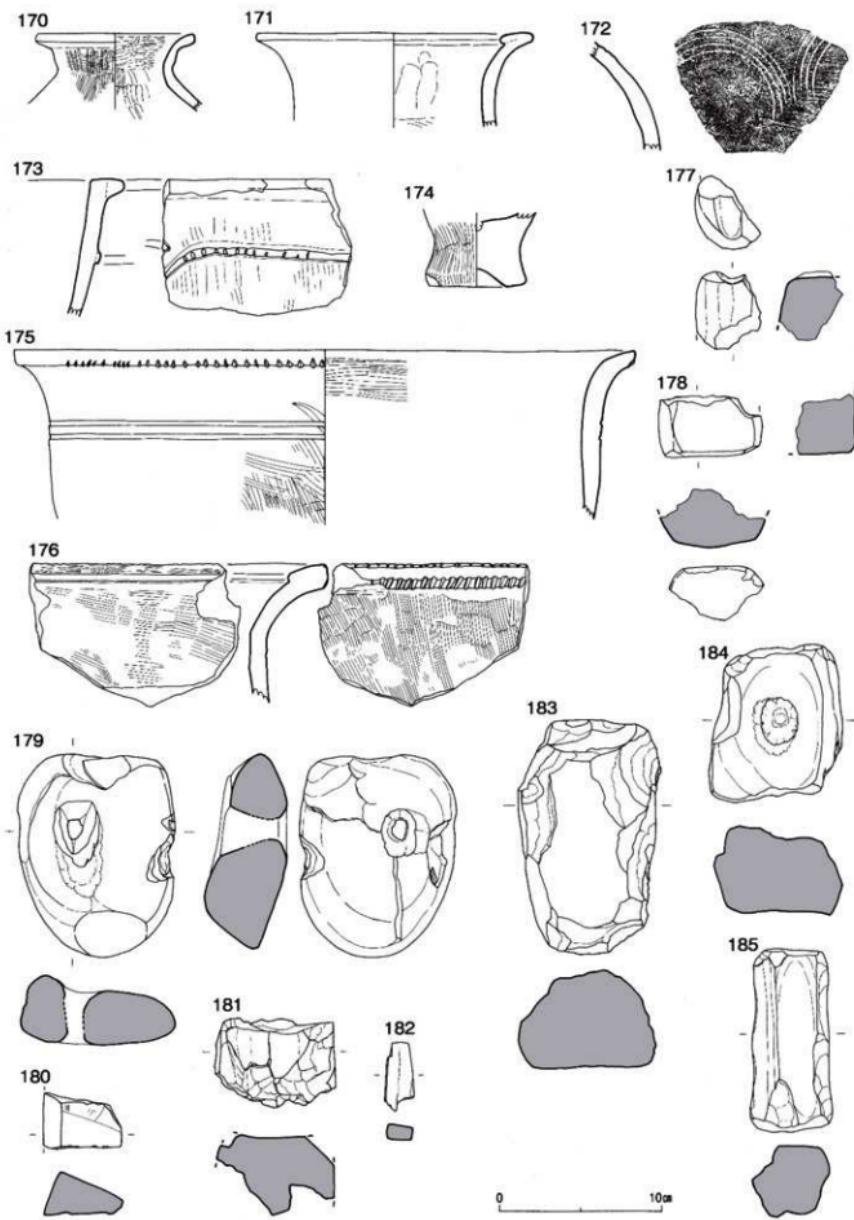


第33図 SK026遺構・遺物実測図 (1/20・1/3)

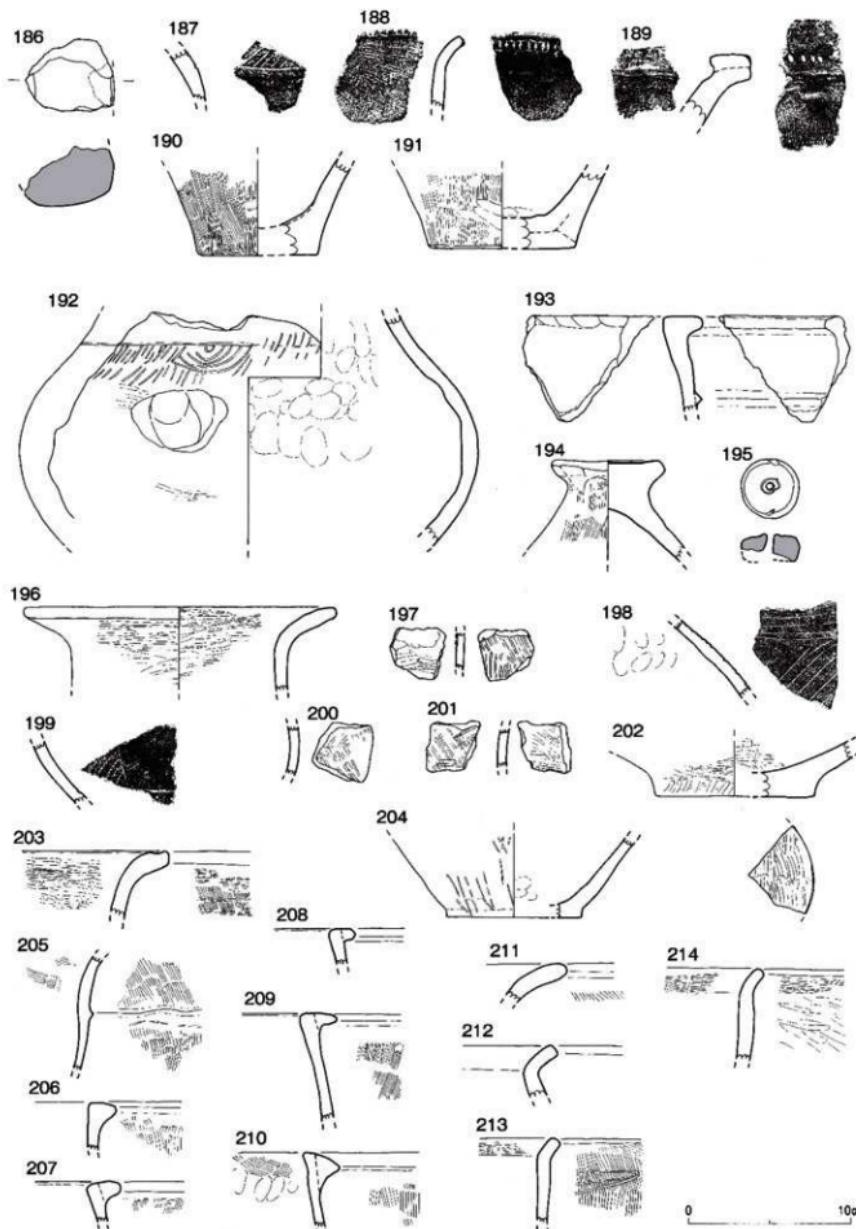
木製品である。長さ19.3cm、幅7.5cm、厚さ1.2cmを測る。直線上に3ヶ所の穿孔がある。組み合わせ式の容器か。153は棒状木製品である。遺存長12.4cm、幅2.6cm、厚さ2.2cmを測る。断面を四角に加工しているが用途不明である。154は両端を欠いており、遺存長48.9cm、幅4.3~7cm、厚さ2.9~3.6cmを測る。蜜柑割りした幹の外側部分を使用している。図の下端に抉りが入っている。155は長さ25.3cm、幅12.4cmを測る。断面は台形で幹を半裁断した後、外側を切断している。156は板材で両端を欠く。遺存長27.1cm、幅3.7~5.3cm、厚さ1.5cmを測る。図の右下に抉りが入る。157~159は鎌の柄の未製品と思われる。159は径8.1cmの幹で枝の部分を利用して成形したものか。157は粗い成形中である。柄の長さ40cm、石鎌装着部の長さ20cmを測る。158は長さ48.5cmを測る。屈曲部から先端に掛けて長さ7cm、幅2.8cmの抉りが入る。石鎌をはめる溝を彫りかけたものか。屈曲部には紐状のものを巻いた痕跡が残る。製作時についた痕跡であろうか。160は棒状木製品で下端を欠き遺存長83.5cmを測る。断面は長方形で径4.8cmを測る。先端部に長軸に直交する幅2.9cm、深さ1.2cmの抉りが入る。抉り以外は未加工である。南側に隣接する25次調査ではほぼ同様の木製品が出土している。161は木の根部分を利用した臼である。上端の径20.7cmを測る。外面は未加工である。臼底部から孔があいているのは腐敗により木心部分が抜けたものであろうか。162は棒状の木片で全体が薄く焦げている。163は杭である。遺存長47cm、径4cmを測る。先端を片刃状に削りだしている。底面で横倒しで出土した。164は長さ62cmを測る。幹を3分割したもので外側は樹皮が残る。165は長さ57cm、幅16cm、厚さ4.8cmを測る。幹を蜜柑割りしたもので元の径の1/16に相当する。図の左側には樹皮が厚く残る。166は鎌の未製品である。遺存長57.4cm、幅11cm、刃の部分の厚さ2.5cm前後を測る。柄を差し込む部分を台形状に削り出す。幹の芯部を使用している。167は長さ109.6cm、幅17cm前後を測る。幹の外側部分を使用しており、図の上側は成形しているが、下端部分は未加工で一部樹皮が残る。168は遺存長102cm、径18cmを測る。幹を成形しているが一部には樹皮が残る。上下両端とも切断されており、上端部に逆台形状の抉りがある。建築材と思われる。

2) 土坑

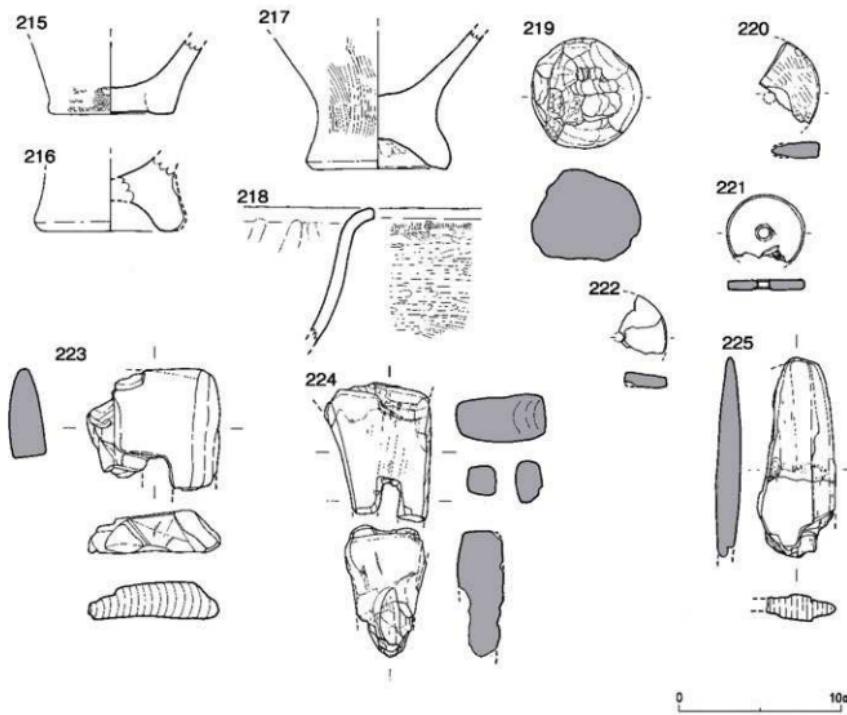
SK026 (第33図) 調査区東端に位置し、谷に接する。平面はいびつな長方形を呈し、主軸はN-49°-Wを測る。長径92cm、幅53cm、深さ10cmを測り、断面は浅皿状を呈す。底面には2ヵ所不整形の窪みがあり、窪みの上に集中して未加工の木の枝が出土した。出土遺物 (第33図169) は柱状片刃石斧と思われる。刃部を欠く。石は灰白色で白い筋が入る。木製品の加工に使われたものか。



第34図 その他の遺物実測図1 (1/3)



第35図 その他の遺物実測図 2 (1/3)



第36図 その他の遺物実測図3 (1/3)

3) その他の遺構

SX034 (図版2-5) 調査区の東端に位置し、主軸は谷の等高線に沿う。掘方は明確ではなく深さは2～4cm前後である。底面には径10cm弱の円がグチャグチャに切り合い、こまかに木片を含む。人為的な掘り込みではなく、足跡による凹みの可能性がある。

4) その他の遺物 (第34～36図170～226)

170～191は未記載の遺構から192～226は谷部から出土した遺物である。170～172は壺である。172は肩に連弧文を施す。173～175は甕である。174は外底部が上げ底で中期前葉に属する。177～178は不明土製品で177は明赤褐色を呈し胎土は0.5～1mmの白色砂と赤色粒、雲母片を含む。平面は円形で断面は台形を呈す。天井部に凹みがある。178はにぶい黄橙色で平面は隅丸方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。179は砂岩製の石錘で715g前後を測る。180・181は磁石片である。180は泥岩で4面を磁面とする。181は砂岩で遺存する3面と磁面とする。182は磁石もしくは柱状片刃石斧の基部、

183・184は砂岩製の凹石、185は砂岩製砥石である。186は不明土製品でにぶい黄橙色を呈す。187は189は甕口縁、190・191は甕底部である。192～195はII区包含層から出土した。195は壺、196は甕口縁、194は蓋、195は土製紡錘車で径3.7cm、厚さ1.1cmを測る。196～225はIII区谷部から出土した。196～202は壺である。197と200・201は頭部に彩文が、198・199は沈線による文様を施す。202は大型壺口縁、203・204は甕底部である。205～214は甕口縁、215～217は甕底部である。前期後半～中期前葉の遺物がみられる。213は外面に沈線で木葉文を描く。219は敲石で径6.7cm、重さ330gを測る。石の種類は不明である。220は復元径5cmの土製紡錘車である。厚さ9mmを測る。中心からややズレで孔が穿たれている。221は滑石製紡錘車で径5.8cm、厚さ6mmを測る。全体に丁寧な研磨を施す。222は石製紡錘車で厚さ8mmを測る。223・224は木製品でいずれも抉りがある。用途不明である。225は遺存長12.1cm。遺存幅4.8cm、厚さ1.6cmを測る。断面はレンズ状をなし、下端にむけて幅が狭く、厚さが薄くなる。広葉樹を使用しているとの指摘をうけた。用途不明である。

5) 動物遺存体

比恵遺跡130次調査では3点の動物遺存体が出土した。これらは調査により遺構を掘り下げる際に目視により検出したもので、フローテーション等は行っていない。SK004からは鹿角が1点出土した。角の基部の傘状に開いた部分で長さ4.2cm、幅3.4cmを測る。径の約半分の遺存だが、断面には刃物痕等は見られない。遠位部側は平坦面をなしており、切断した可能性があるが、表面が劣化しており、詳細は不明である。表面は明褐色を呈し、内側側部は炭化し黒色を呈す。SK030からはイノシシの歯が2点出土した。上顎のM3が左右1点ずつ、右側は近位側が欠損している。いずれも咬耗は少ないが右の方が若干咬耗が進んでいる。イノシシヒシカは近辺で捕獲することができたため、捕獲して食料として利用されたものである。鹿角は遠位側が平坦面をなしており、骨角器として利用した端材の可能性がある。

3. 小結

調査区内には以前煉瓦作りの建物が建っており、それに伴って築かれた深さ1.5m程の貯水池により調査区の西側1/3では遺構を確認できなかった。調査区中央から東側も建物基礎により削平を受けていたが竪穴土坑3基、土坑2基、柱穴群、谷を確認することができた。竪穴土坑は底面の凹凸が著しい上に貼り床が見られないことや柱穴が無いこと、また地表面からの深さ1.7mと湧水層を抜くまで掘り込んでいくことから竪穴式住居とは考えがたいうえ、湧水があることから作業場としても考えにくい。南側隣接地の25次調査で出土したSK10・11・15は長径が3m前後と小型であるが、底面標高は3.4m前後で同様に未製品、削材、板材などが出土している。報告書（福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集「比恵遺跡群10」）では本製品製作加工過程の一部である水中浸漬するための貯木土坑としているが、130次調査のSK001、004、030も同様と考えられる。25次調査で出土した木製品と未製品、加工材は点数と種類において130次調査よりも豊富であり、本製品製作の中心は130次調査よりやや南の25次調査区の近くと思われる。25次・130次で出土した未製品は鉄、鋤、エブリ、石鎌の柄などの農具や石斧の柄、手斧の柄など工具や匙、竪杵、臼などの生活用具、建築材などの生活必需品であるが、今回木製高壙など出土例の少ない木製品の未製品が出土して、その製作地の一つが明らかになったのは木器製作の研究の点で有意義であったと言える。その他にはSK001・028・030とも安山岩と黒曜石の原石が出土しており、石製品の製作も行われていた。周辺地域は前期から中期前半の遺構が集中する場所であり、今後の調査の進展が楽しみな場所である。

比惠遺跡130次調査遺構一覧

遺構番号	性質	時代	遺物	備考
001	壁穴土坑	弥生時代前期後半	甕(弥生前期後半), 盒(弥生前期中頃～後半), 黒曜石片(原石1点 破片2点), 木片(細い枝を主とする)が多岐に土	I区は遺物多い。II区は擾乱により底面近くまで削平を受ける
002	擾乱	現代	白磁片(原石1点)	
003	谷部包含層	弥生時代中期前葉	甕(小片 多 弥生中期前葉), 盒(弥生前期、中期中頃), 黒曜石片(1点), 瓦(現代), 柵付(現代)	
003墨色土			甕(小片 多 弥生中期前葉), 盒(弥生中期前葉), 土器小片多, 黒曜石片(2点)	
004	壁穴土坑	弥生時代前期末	甕(弥生前期後半～中期初頭 2個以上), 甕(多量 弥生時代前期後半), 盒(弥生時代前期中～後半), 盒(弥生時代前期), シカラ骨, 疊石(砂岩), 石錐?, 石錐, 黒曜石, 安山岩(剝片), 花崗岩, 泰北化木, 木炭, 不灰, 灰化物	数点中基面中頃と思われる破片が出土。鉢れ込みか
005		弥生時代後期以降	袋状口壺?, 甕(2点 弥生時代)	
006		弥生時代前期後半	甕(弥生前期後半), 甕(弥生前期後半), 土器片(弥生時代?)	
007		弥生時代	甕(弥生中期前葉), 土器小片(不明), 黒曜石片(1点)	
008		弥生時代中期	甕(弥生中期), 器台?, 土器小片(不明), 陶土塊	いずれも小片
009		弥生時代中期前葉	甕(弥生中期前葉), 土器小片(1点)	
010	現代		コンクリート, 土器片(3点)	
011	不明		土器片(1点 瓦?)	
012	弥生時代		土器小片(5点 弥生時代), 黒曜石片(1点)	
013	現代		コンクリート, 甕(弥生中期)	
014	弥生時代前期		甕(弥生前期), 土器小片(4点)	
015	不明		土器小片(1点 不明)	
016	弥生時代前期～中期前半		土器小片(3点)	
017	不明		小円墳(1点)	
018	弥生時代		甕(小片 2点 弥生時代)	
019	弥生時代		土器小片(3点 弥生時代)	
020	弥生時代中期前葉?		甕(弥生中期前葉), 甕(不明), 土器小片。	
021	弥生時代		甕(小片1点 弥生時代)	
022	弥生時代～中期前半		土器小片(2点 瓦か)	
023	不明		土器小片(6点)	
024	弥生時代か		土器小片(3点)	
025	不明		土器小片(2点)	
026		弥生時代中期前葉	甕(弥生中期前葉), 瓢形(弥生中期前葉), 甕(小片のみ), 土器小片, 柱状片刃石斧?	
027		弥生時代	甕(小片 弥生時代), 盒(弥生時代中期), 土器片	
028		弥生時代前期後半～中期前葉	甕(小片 多 前期後半～中期前葉), 不明土製品, 折探(1点), 黒曜石(剝片 1点 原石4.8×3.7×2.9cm 1枚)	
029	不明		土器小片(1点 不明)	
030	壁穴土坑	弥生時代中期前半	甕(弥生前期後半～中期前葉), 甕?, 甕(弥生前期後半, 中期前葉), 瓢(小片), 瓢形(汲田), 石包土(小片), 黒曜石片(原石), インシケ(2点), 花崗岩, 安山岩, 木炭	
031		弥生時代前期後半	甕(小片 前期後半), 甕(小片 1点 前期後半 脊部に縫合文), 黒曜石片(1点), 板状(一部炭化), 陶土物(1点)	
032		弥生時代前期後半～中期	甕(小片 前期後半～中期), 瓢形(小片), 石製結縫器	
033	土坑	弥生時代前期後半	甕(前期後半), 甕(前期後半), 土器小片(不明), 炭化物	
034	不明	弥生時代中期以降	甕(小片 多 弥生時代初期), 甕(弥生時代前期後半), 瓢形(弥生中期前葉), 土器片(弥生時代初期～中期), 黒曜石(鉋形), 瓢形。	
035	不明		甕(弥生時代 小片1点), 土器片(小片 5点)	
036		弥生時代中期前半	甕(弥生時代中期前葉), 甕(小片 2点 脊部に側面穿孔あり), 大型甕(弥生時代前期後半～中期前葉, 小片1点)	
037	不明		甕(小片 1点), 土器片(弥生時代? 小片13点)	
038	不明		甕(小片 1点), 土器片(小片 1点)	
039	不明		土器片(小片 2点)	
040	不明		土器片(小片2点), 黒曜石(剝片 1点)	
041	不明		甕(弥生前期 ? 小片 1点), 土器片(小片 1点)	
042		弥生時代中期前半	甕(弥生中期前葉～中期前葉), 甕(弥生中期前葉), 甕(弥生中期前葉, 中期前葉), 瓢形(弥生中期前葉), 盒(圓底瓦2点, 内面墨1点), 木片(1点)	
043		弥生時代前期後半	甕(1点 弥生前期後半), 甕(1点 弥生前期)	
II区東面包含層			甕(小片 多 弥生前期後半, 弥生中期前葉), 盒(3点 前期後半 脊部に縫合文), 土器小片多, 瓢形(前後半), 中期前葉?, 瓢形(吸水), 弥生中期前葉, 黒曜石片(2点), 瓶口?	
II区横			甕(弥生前期後半～中期前葉), 盒(板付 3点 弥生前期後半 脊部に縫合文)	
II区西面溝拂			甕(小片 弥生前期後半, 中期前葉), 黒曜石片(1点)	
III区横			甕(小片 多 弥生前期後半～中期前葉), 甕(弥生前期?)	
III区谷部			甕(小片 多 弥生時代前期半が主 中期前葉が数点), 甕(弥生前期後半 脊部に縫合文), 大型甕, 瓢形(弥生中期前葉), 黒曜石片(7点), 瓶口?(1点), 准石片(准石製品?), 文武若片(1点)	遺物多い
III区谷部上層			甕(小片 多 弥生中期前葉), 甕(弥生中期前葉), 瓢形(弥生中期前葉), 黒曜石片(2点), 瓶口?	
III区谷 中層	弥生時代前期後半～中期		甕(弥生前期後半 1点 前期後半～中期前葉), 甕(弥生中期前葉), 瓢形(弥生中期前葉), 黒曜石(原石), 黒曜石片(2点)	
III区谷中黑褐色土			甕(小片 多 弥生前期), 甕(弥生中期前葉), 不明土製品	
III区背面清拂			甕(弥生前期後半, 中期前葉), 瓢(大型 時期不明), 土器片, 木片(一部炭化)	
III区清拂(O30)周辺				



1. II区全景(南西から)



2. III区全景(南東から)



1. SK001 I 区(北東から)



2. SK001完掘(南東から)



3. I 区全景(北東から)



4. SK033土層(北から)



5. SX034(足跡?)



1. SK004(南東から)



2. SK004完掘状況(南東から)



3. SK004遺物出土状況(南東から)



4. SK004大型壺出土状況(北西から)



5. SK004竖杆出土状況(南から)



1. SK004北側(南から)



2. SK004木材(南から)



3. SK004エブリ出土状況(南から)



4. SK004木製柄杓(北から)



5. SK004木製壊出土状況(北西から)



6. SK004壺・木板(北から)



7. SK004彩色壺



8. SK026(北東から)



1. SK030(北西から)



2. SK030遺物出土状況(南東から)



3. SK030下層遺物出土状況(北西から)



4. SK030完掘状況(北西から)



5. SK030西侧遺物出土状況(南から)



1. SK030中央部遺物出土状況(南東から)



2. SK030鎌柄出土状況(北西から)



3. SK030鎌出土状況(南西から)



4. SK030長斧柄出土状況(北西から)



5. SK030木臼?出土状況(北から)



6. SK030木器出土状況(北から)



7. SK030土層(北西から)



8. III区谷部土層(南から)

報告書抄録

ふりがな	ひえ 7 0						
書名	比恵70						
副書名	比恵遺跡群第130次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1292集						
編著者名	屋山洋						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	2016年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
ひえいせきぐん 比恵遺跡群 第130次調査	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 はたたくちく 博多駅南3丁目4-13	40137	0127	33° 34' 56"	130° 25' 37"	20140106 20140326	348m ² 共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群 第133次	集落	弥生時代前期	竪穴土坑・土坑	弥生土器・ 木器・石器			
要約	台地縁で径6m前後の竪穴土坑が3基出土した。底面は凹凸が多く、また谷に接しているためか湧水が多く住居とは考えにくい。底面から数cm浮いて多量の土器と木器が出土した。土器は弥生時代前期後半が主で、若干中期前半を含む。木器は製品と未製品、素材の板等が含まれるほか、枝なども多く出土した。						

比 恵 70

-比恵遺跡群第130次調査報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告書1292集

2016(平成28)年3月25日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092)711-4667
白崎 有限会社 プリコム
福岡市博多区冷泉町1-20
(092)282-5321